GAPニュースレター ●UFOと宇宙哲学の研究誌● 48

GAPニューズレター第48号目次

なぜ彼らは来るのか（７）・・・・・F・ステックリング　1
日本列島が空中に浮かぶ！・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
私の想念観察法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
ＵＦＯ夜話３題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
<改訳>空飛ぶ円盤同乗記・・・・Ｇ。アダムスキー　21
日本ＧＡＰ総会，盛況裏に終了・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
ＧＡＰ英語教室・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
声・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
月例研究会案内・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38

ＧＡＰとは

ＧＡＰは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で，世界中の人々が空飛ぶ円盤の真相について〝知る〟機会を与えられるべきであるという見地に基ずいて１９５９年にジョージ・アダムスキーによって創始されました．彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して，来たるべき時代に眼を転じること，人間はすべて〝コズミック・パワー〟の御子であり，そのパワーの諸法則が宇宙に遍満している事実を確信をもって知ること」にありました．この諸法則は他の世界（惑星）から来る友好的な訪問者からもたらされた〝生命の科学〟の研究と理解を通じて体得できるものです．

日本ＧＡＰの目的は円盤とスペースブラザーズ問題を関心ある人々に伝えることにあり，奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります．その中心思想は次のとおりです．

1．この太陽系の他の惑星群から偉大な発達をとげた人類が地球を訪問しつつある．
2．他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト（接触）しており，危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている．官民を問わずスペースブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが，通常その真相は洩らされていない．
3．ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は，人類の起源と未来の運命の真実を知るのに有益である．

本誌は他の団体・個人と対立するものではなく，政治・宗教と関係のない非営利刊行物です．本誌が読者に対して多少とも役立てば幸いです．

◎ＧＡＰ参加グループを有する国は次のとおりです．
アメリカ，オーストラリア，ベルギー，ブラジル，カナダ，デンマーク，イングランド，フィンランド，ドイツ，オランダ，インドネシア，日本，メキシコ，ノルウェー，スエーデン，スイス（ＡＢＣの順．１９７１年６月現在）

表紙写真はジョージ・アダムスキーが撮影した金星の母船。数個の輝く円盤を発射した光景である。

本誌掲載記事はすべて翻訳転載権取得済。禁無断転載。

なぜ彼らは来るのか(7)

フレッド・ステックリング

久保田八郎訳

第10章　質疑応答(2)

問　大気圏外のどこかに〝霊界〟が存在しますか。

答　宇宙人の説明によれば存在しないということです。この地球は太陽系内で科学的にも社会的にも最低の惑星ですが、土星と金星は最高です。しかもこれらの惑星にも地球人と同様の三次元の肉体を持つ人間が住んでいます。我々の島宇宙は十二個の太陽系から成っていて、高度に磁化された物質の中核の周囲を廻っています。万物が――太陽群、惑星群、惑星上の万物が――みな三次元の物体です。多数の惑星には人間が住んでいて、利己的な人々によって支配されています。しかしなかには、エゴの心をコントロールしてこれを克服しようとする人々によって治められている惑星群もありますし、またなかには因果の法則を知っていて、そのゆえに各元素の支配者となった神のような人々によって一体化されている惑星群もあります。惑星とは、決して終わることのない生命のレッスンが学ばれねばならない宇宙の教室です。「父の家の中には多くの住む場所がある。あなた方のために場所を準備してあげよう。私のいる所にあなた方をおらしめるために」とナザレのイエスは言ったことがあります。道徳の法則の教師として因果の法則を知る人としてのイエスの知恵と知識は不滅でしょう。イエスの言う〝多くの住む場所〟とは三次元の世界であって、このことは我々が認めようと認めまいと事実なのです。

問　宇宙人は肉体的な外観において地球人とは異なっているという理由が説明できますか。というのは、地球の科学者によればこの太陽系内の他の惑星群の異なる環境は我々が知っているような知的生物を維持するとは考えられないというからです。

答　これらの科学者は一体他の惑星へ行ったことがあるのでしょうか。私に言わせれば次のとおりです。一人間に対する地理的なパタンは宇宙

を形成する無数の惑星を通じてすべて同様なのです。一惑星が生命を維持する準備ができたならば、他の惑星の人々がそこへ行って住みつきます。これはちょうど二百年前に米国西部へやって来たパイオニアーのようなものです。私が聞いたところによれば、この太陽系の他の惑星群の環境は我々が考えるほどには極端に変わっていないということです。ただ惑星の大きさや年令に応じて、我々がこの地球上で異なる段階でこのような相違を体験するのと同じことです。たとえば海抜ゼロメートルでは一平方インチあたり十五ポンドの気圧を測定しますが、一方五千フィートの高度になれば当然気圧は減少します。このことは大気中の酸素についてもいえます。ところが気候の寒暖、気圧の高低、酸素の多少の如何にかかわらず、地球の人間はすべて同じように見えます。地球にはアフリカのピグミーやワトゥーシスの如き小人や巨人族がいますし、高地の人々のなかには肺の大きな人もいれば、海抜ゼロメートル地域ではさほど肺の発達を必要としません。しかし再度述べますと、これらはみな人間であり、外観は等しくて、一大宇宙家族を形成しているのであって、広大な宇宙を通じて存在する人類の住む無数の惑星も同じことです。

問　あなたの説明によりますと、多数のスペースピープル（宇宙人）がひそかに地球人のなかにまじって住んで働いているということですが、彼らは一体どのようにして証明書類なしにすごせるのですか。たとえばこのオーストリアでは住民はほとんど毎日自分の身分証明書を提示することを要求されますが——。

答　こうした証明書を入手することはあなたの想像以上にはるかに容易なのです。たとえば一方法として、霧の深い夜にハンガリーとの国境から避難民として来ればよいのです。国境がウィーンからさほど遠くないし、命からがら逃げて来た人がほとんどだということをみな知っています。証明書も金も持っていません　オーストリア政府は彼らに政府管理の避難所を与えます。これは米国がキューバ問題でやっていることです。すると新しい身分証明書が各人に手渡され、金や仕事も与えられます。宇宙人が地球上に多年滞在しようと思えば、たしかにこうした身分証明書を必要としますが、その場合はおそらく以上述べたような方法で入手するでしょう。

アダムスキー氏がかつて私に語ったことですが、宇宙人のなかにはその正体のゆえに政府によって知られている人がいるそうで、時々彼らは必要とあれば如何なる場合においても保護と必要品が与えられるということです。しかし官憲に知られている宇宙人はごくわずかなので、こんなふうにして彼らはいわば〃保護を受けてこっそりと〃すぐれた仕事をすることができるのです。

問　宇宙人は地球から彼らの惑星までの距離に関してどのように言っていますか。この太陽系の各惑星間の距離に関する従来の仮説は正しいのですか。

答　正しくありません。各距離は我々が考えているよりもはるかに短いのです。だから初期の人工衛星やロケット類は目標を行きすぎたりしたことがありました。宇宙人から与えられた有益なアドバイスや情報に注意を払った結果、現在はロケットの目標到達の成功率を高めています。しかし正確な距離については私にもわかりません。ただ従来考えられていたよりもはるかに短いということは事実です。

問　私は宇宙船すなわち空飛ぶ円盤が〃高い次元〃から来ると称している或る円盤研究グループを知っています。それによりますと円盤は〃四次元〃から来るということです。このグループは五次元、六次元、七次元の高さまで考えているようですが、これは真実ですか。

答　このグループはこのようなナンセンスを支持したり広めたりすることによって真の宇宙的な知識がもたらされるのを妨げています。彼らは円盤研究界に害あって一利なしです。次元という言葉の意味を説明しましょう。三次元というのは太陽、惑星、惑星上の諸物体等の如き自然界の現象として現われた形を意味します。四次元というのは自由な状態にある原子群です。大気圏外で旋回しているすべての原子は人間の眼には見えません。ところが吸引の法則によってそれらが引き寄せられて物体が形成されると、そこに三次元が生ずることになります。これ以上の次元（四次元、五次元）は神秘グループによって創作されたものにすぎません（注―ステックリングの言う四次元は一般の哲学的意味における四次元と異なるものである）。

問　反物質の説についてどう思いますか。人によっては反物質太陽系や反物質人間さえもどこかに存在するかもしれないと言っていますが――。

答　反物質についてはほとんど知られていません。科学者でさえも反物質に関する自分たちの不自然な説を支持しようとして絶えず多くの証拠を求めています。私が自分の研究から言えることは、電荷量の少ない荷電微粒子が生じるような二つの現象が発見されているということです。一つは自然現象であって、これは電離層の上層部で宇宙線のたえまない〝砲撃〟によって発生します。物質の電荷量の多い荷電微粒子がしばらくのあいだ低い電荷を帯びることがあります。この場合の微粒子を〝反物質〟と名づけています。しかし再度高い電荷を帯びるために長続きしません。他のあらゆる微粒子に対して〝反〟であるこれらの微粒子は太陽系・惑星・人間等の物体を形成することはできません。物体は決して変化することのない吸引の法則――陽・陰、陰・陽――によって形成されます。しかし宇宙線の砲撃によって生み出される〝反〟微粒子はきわめてまれなために、科学者はこれまでその存在を確証するのに難渋していました。人工的に〝反〟粒子を生み出す別な現象は核反応に見られます。しかしこの場合も短時間後にこの中性微粒子は変化して、ふたたび以前の高い電荷を帯びます。一九六六年のタイム誌に掲載された記事では次のように述べてあります。「我々は〝反物質〟に関する研究にノーベル賞を与えた。しかしその学説はその研究の時点において誤りであったことが判明したからには、そのノーベル賞を徹回して〝反ノーベル賞〟を与えることにできないものか」

問　空飛ぶ円盤は〝地球の内部〟から来るのだという説について説明して下さいませんか。

答　宇宙人やアダムスキー氏が何度も述べた話によれば、これは真実ではありません。前述のように、各惑星のコンディションが〝地表の生命〟のために快適となるやいなや他の惑星の人々がやって来て住みます。地球の地表下数百マイルの底に存在するものすごい圧力や熱その他危険な地下核実験などのために、地下に生物が住めるわけはありません。一部の著述家が言っているように円盤が地球の内部から来るとすれば、あの巨大な母船は一体どこから来るのでしょう？　小型円盤は大母船で惑星間を運ばれるというのは確認された事実です。円盤や組立ビルディングがどこかの巨大な大洞窟――たとえば北極あたりの――で発見されたという話はほんとうかもしれません。しかしこの場合も幸運な探険隊の隊員が、人跡未踏の洞窟中に宇宙人が一時的に設置した宇宙基地の中に入ったのです。たぶんこれに関する真相が後にゆがめられて、惑星間宇宙船（ＵＦＯ）やその発進惑星に関心を持つ大衆の考えとごたまぜにされたのでしょう。

問　あなたは近隣の惑星から来る訪問者は慈悲深い人々だと言われまし

たが、非友好的な訪問者が地球に着陸したこともあり得るでしょうか。

答　もちろんあり得ることです。旧約聖書に記録されている宇宙からの訪問者のなかには時としてあまり高貴でない人々もいます。しかしこれは数千年前に起こったことで、それ以来こうした宇宙人は〝高貴さ〟を求めて非常な努力を払っています。しかし金星と土星の住民は常に地球人に平和と理解をもたらしています。時々別な太陽系からやって来る宇宙船もあるかもしれませんが、これはおそらく教育目的のためでしょう。この人々は敵対的ではありませんが、地球人の〝身の上〟を案じることもしません。また別な宇宙船のなかには地球の海中から無機物を集めに来るのがいるかもしれません。しかしこのような行為も敵対的ではありません。

高貴な宇宙人の眼にとっては、あらゆる惑星は神の創造になるもので、人間の所有物は何一つありません。彼らは自然界の贈り物を生活の目的に使用するでしょうが、いつかはこの無機物も元の自由な状態に返るでしょう。我々は筋の通った考え方を持つ必要があります。長いあいだ惑星間や太陽系間を自由に旅行するほどに技術的に進歩した人々ならば、地球が彼らの利益の対象であったとすればとっくの昔に地球を征服してしまったことでしょう。しかしそのような事は起こりませんでした。ですから前にも述べたように「恐怖それ自体以外に恐怖すべきものはない」のです。

問　宇宙人は人間がどこから発生したかについてあなたに語ったことがありますか。

答　私は聞いていませんが、アダムスキー氏はブラザーズとこの問題を詳細に話し合っていますから、これについて私が氏から聞いたことを話しましょう。

この太陽系のあらゆる惑星ばかりか、別な太陽系の惑星群さえも何度も訪問している金星人や土星人はそれをこんなふうに説明しています。

「人間はこの太陽系から発生したのではなく、彼らが訪問した別な太陽系から発生したのでもない。彼らは（金星人、土星人は）これについては全くひかえ目であり、この解答については完全に不明であることを率直に認めている。彼らが発見した限りでは、この太陽系内の全惑星群と近隣の太陽系群は、居住に適するようになった時に人々がやって来て住みついた。したがって一般に認められている進化論は或る程度誤りであるように思われる。少なくとも温かい血液を持つホ乳動物である〝人間〟に関する限り——」

遠い昔、この太陽系が形成される前に、社会的にも科学的にも高度に進歩した文明（複数）の人々がこの広大な宇宙空間の別な太陽系をすでに自由に航行していたというわけです。宇宙には始めも終りもありません。

問　天文学者によれば木星や土星には衛星があるということです。これらの衛星には人間が住めるのですか。

答　ながには人間の住めるのもあります。特に大きな衛星はそうです。

問　火星の二つの衛星は火星人によって人工的に建造されたものですか。

答　そうです。フォボスとダイモスは金属製で、人工の宇宙ステーションです。大きい方は火星の政府の代表者団を維持しており、小さい方は気候ステーションです。この気候ステーションから雨が人工的に作られて、火星表面の雨の必要な地域にふらせることができます。

フォボスは直径約十マイルで、火星表面から三千七百マイルの空間を動いていて、七時間三十九分で火星の軌道を廻っています。一方ダイモスは径約六マイルで、火星表面から一万二千五百マイルの距離を廻って

ており、三十時間ごとに一回火星を廻っています。両衛星とも互いに火星の周辺を相反する方向に廻っていますが、これは自然の衛星とは異なる現象であり、しかも自然の衛星にしてはそのサイズのわりに光りすぎています。以上はブラザーズから聞かされたことで、また天文学者の発見でもあります。

（注＝火星の衛星については、この訳稿執筆中の一九七一年十二月三日付の英字新聞ジャパンタイムズ四面に次のような記事が掲載されたので参考までに抄訳をかかげることにする。「二十六キロ×二十一キロの大きさを持つ火星の衛星フォボスが水曜日にジェット推進研究所の科学者連によって歓声とともに確認された。これはマリナー九号によるすばらしい成果である。この写真は周辺が盛り上がったクレーターを示しており――中略――一見地球の月に似た表面を示している。このフォボスの写真は同衛星の五千四百九十八キロメートルの位置から撮影された」）

問　一九六五年の火星探険マリナー四号が撮影した二十二枚のテレビ写真は、なぜ火星の生命を洩らさないのですか。

答　撮影された写真類のなかには生命存在のシルシを示しているのもありますが、一般大衆に対してはわるい写真が公表されました。約十二枚の写真があったと私は信じています。これらの写真は火星表面から六千マイル以上の地点から撮られたものですが、一方、地球から四百五十ないし六百マイル離れた軌道を廻っているタイロス気象衛星は、地球を撮影した十万枚の写真を送り返していますが、地球上の生命存在のシルシを示していません。タイロス衛星による写真はマリナー四号の写真よりも十倍も地球に接近して撮影されたのですが、それでも生命存在のシルシを全然示さなかったのです！　火星上に実際に人間が着陸しない限り、これらの衛星の発見事に関する声明は意味をなしません。

問　私たちはいわゆる〝審判の日、すなわち世界の終末〟について多くの事を聞いています。あなたの意見では、宇宙人は我々を救うのでしょうか。

答　人が自分を審（さば）くわけではなく、自分が自分を審くのです。宇宙人はただ〝教えるために〟地球へ来ているのであって、選ばれた少数の人を救いに来たり我々の無知をあばくために来たりするのではありません。何かの救助が行なわれねばならないとすれば、我々が自分自身の宇宙船を建造することによって自分たちを救助しなければならないでしょう。このようにすれば、たとい地球が終末になるとしても我々は自分の宇宙船で出発して別な太陽系の惑星に住みつくことができるでしょう。アダムスキー氏がよく言っていたことですが、次の世代が生きのびようとするのならば、自由に宇宙を航行できる宇宙船の必要が認められねばなりません。地震や大洪水といえば、あらゆる惑星にも自然の力が発生します。こうした現象を〝災難〟とするのはこの地球だけで、これは地球人が財産を所有していて、それを失うまいとするからです。地球人が自分の考えを捨てて創造主の法則によって生きようとするならば、自然界を恐れる必要はありません。自然界こそ〝自然のまま〟であるからです！

問　人間のあらゆる知識は潜在意識に記録されているのですか。

問　イエースまたはノーです。次のように説明しましょう。人間は四つの感覚器官から成る心を持っています。視覚、聴覚、嗅覚、味覚です。これらの各感覚器官のサポーターすなわち両親は〝宇宙の意識〟、〝エネルギーのスパーク〟または全知全能の宇宙の英知〟であって、これはソーラープレクサス（注＝胃のうしろにある太陽神経叢（そう）。俗にいうミズオチ）の下部に位置しています。そこで言えるのは、人間の魂すなわち意識は肉体の下部に位置しているということです。我々人間が大抵の感覚

を起こすのはこの部分なのです。人間が妊まれるのもこの位置であり、食物が消化されて肉体が維持されるのもこの部分です。これらすべては人間の四つの感覚器官から成る〃心〃の援助がなくても行なわれているのです。ひとたび魂すなわち英知が人体を離れるならば（これを我々は死と呼んでいます）、あらゆる感覚器官はなおも完全な状態にあるにしても、知覚がなければ魂が我々に与えるフィーリング（感じること）は起こらなくなります。そこで実際には潜在意識というものは存在せず、あらゆる行為を導く〃宇宙の英知〃または〃宇宙の意識〃が存在するのです。人間は理解できない物事を分類していて、そのためにその物事は隠されていると考えています。そこでそれらの物事は「この下層にある」「あの下部にある」などと言われているわけです。神秘主義団体のなかには第五次、第六次、第七次の〃感覚〃を創作するのさえありますが、彼らは四つの感覚器官を全然理解していません。もちろん彼らがとなえている事はすべて誤りです。

問　真の宇宙哲学をマスターする方法を教えて下さい。

答　重要なのは、宇宙哲学（注＝これは書名ではなくアダムスキー哲学全般を意味する）の資料を徹底的に研究して、しかもそればかりでなくその教えを生かすことです。そうしないことには宇宙哲学から何も得られないでしょう。もちろん、みな知っているように、これは最困難事です。自分の半身（宇宙の意識）に気づきながら、同時に感情のバランスを失わないでこの世の日常の雑務を完全に遂行するというのは困難です。これはライフタイムワーク（生涯かかる仕事）になるでしょう。宇宙哲学の教えの真意を理解したならば、自分が〃宇宙的人間〃になって、肉体的なエゴ人間にならないように自分のエゴの意志とプライドを捨て去る必要があります。

問　スペースブラザーズは宇宙のセンターすなわち〃王座〃がどこか存在すると言っていますか。

答　宇宙に〃王座〃はありません。あらゆる物質の原子はそれ自体のセンターを含んでいて、そこからあらゆる生命が放射されていますので、結局〃王座〃は原子自体の中にあるということになります。最小の自己維持単位としてのその生命力は、その内部の中心すなわち核から放射されています。神すなわち創造主が慈悲や愛を表現するのはこれらの原子を通じてなされるのです。我々の肉体は無数ともいえるほどの原子から成り立っていますが、その原子群のすべてがいわば〃王座〃を含んでいるわけです。「我々の肉体は生ける神の宮である」と述べたイエスの言葉は右の原理にもとづいて発せられました。

問　神学者のなかにはノアの箱舟が実際には宇宙船であったと仮定することによって正しい手がかりをつかんでいると考えている人があります。これについてはどうですか。

答　聖書に述べられているノアの箱舟の大きさによれば、あらゆる種類の動物を一対ずつ乗せるのは不可能だったと思われます。ましてこれらの動物に食べさせるための大量の食物を積み込むのが不可能だったことはいうまでもありません。科学的な計算によれば、もしこの箱舟が実在したとすれば数百万トンの重量となるでしょう。そこで再度申しますと、我々は筋の通った推理を行なう必要があります。より以上に筋が通っているのは惑星間宇宙船の想定です。この宇宙船は長さが数マイルもあり、地球の回転軸の傾斜などによって大洪水が発生した場合に動物が死滅したあとふたたび動物類を諸大陸に送り込むのに役立ちます。これは唯一の筋の通った考え方です。なぜなら地球では一大陸に特定の種類の動物が存在するのに、同じ環境下にある別な大陸にはその動物がいないから

です。たとえばオーストラリアのカンガルーはアフリカや南米には存在しません。しかるに後者の二大陸の生活条件はオーストラリアと同じです。これはウサギにもあてはまります。ウサギはだれかがヨーロッパからオーストラリアへもたらすまではオーストラリアでは知られていませんでした。象は南米には存在しませんが、南米の条件はコンゴやインドと同じです。これらの事実は進化論の支持者を悩ませてきました。しかも彼らはその理由がわからないのです！

問　知的生命が大気圏外のどこかに存在するといわれますが、どうしてそれを確言できますか。

答　この質問に対する私の唯一の回答は次のとおりです。時々私は人間がこの地球上で知的であるといえることに確信が持てなくなります。知的生物と呼ばれたがっている人間はそれに恥じないような生き方をしたことがほとんどありません。他人や自然界と対立する人間の愚劣な行為がその事実を示しています。

問　もし金星に人間の着陸が行なわれたとして、宇宙飛行士が金星には生命は存在しないと報告したとすれば、あなたはどう説明されますか。

答　金星には地球と同様に数十億の人間が住んでいます。しかし遠からず宇宙飛行士が金星へ送り込まれるとして、しかもそのために地球上に経済的、社会的、宗教的なトラブルが発生するとすれば、宇宙飛行士は金星上の生命に関して否定的な報告をするように命ぜられるでしょう。地球人が少なくとも或る程度宇宙的なプランに順応しないでエゴのために互いを利用しながら古いやり方でやってゆこうとするならば、〝せっかちな情報〟を流すことはしないでしょう。

ところがひとたび大衆が別な惑星に地球人と同様な人間がいるという概念を受け入れるならば、大衆はその惑星人の生き方や人間の相互関係について知りたくなるでしょう。ひとたび大衆がこの情報を入手するや現在の生き方の変化を求めるようになるでしょう。ですから当分の間、地球上に「（情報の）出入り厳禁」という看板がかけられるかもしれません。

問　いつか地球上に平和が来るとは思いませんか。

答　その可能性があることを私は知っています！　私はそのために一生懸命に活動していますし、同胞がいつかは他人を殺すことが不可能になることも信じています。しかし人間が両手に剣を持ったまま平和の祈りをしている限り地球には平和は来ないでしょう。人類は数千年間祈ってきましたが、役立ちませんでした。これは無知のために「戦争に勝たせたまえ」と神に頼んだり、一国を祝福して他国を無視してくれと願ったりしたためです。おわかりのように創造主はこんなふうに働きません。人間はみな神の子であり、神は皮膚の色、宗教、国籍に関係なく万人に等しく関心を持ちます。そうです。私が心から希望するのは人間がいつかは地球上に平和を迎えることです。地球人を援助するために地球へやってくる〝訪問者たち〟もそれを希望しています。もし訪問者たちが地球上の平和が可能だということを知らなかったならば、ずっと昔に地球をほったらかしてしまったでしょう。だが彼らは今日失われる物は明日は取り返せることを知っています。この事を別な惑星から来る友人たちは信じていますし、私も信じています。

問　より良き人間になるためには如何なるタイプの教えを受け入れるべきでしょうか。また、だれが教えを与えていますか。あなたの説明によればこの世で宇宙人とアダムスキー氏だけが正しい事を伝えているというふうに響きますが——。

答　もし人間がたとえばナザレのイエスまたはその他多くの偉大な人々

の教えをただ語るだけでなしにそれに従って生きてきたとすれば、アダムスキー氏や宇宙人がもたらした教えが奇妙な未知なものには思えないでしょう。自然の諸法則はこの世界にとって新奇なものではありません。時代のれい明以来その諸法則がはるかに高い進化をとげた人々によって我々に与えられてきたからです。宇宙人もアダムスキー氏も〃万物の理解者〃と称したことはありません。人間はそんなことを自称することはできないからです。しかし両者はこの件に関してより適切なアプローチを与えてくれました。偉大なる教師（イエス）は人間に対して「殺すな。父の仕事にとりかかれ」と教えましたが、人間は耳に入れません。与えられる知識を取り入れるか捨てるかは人間にかかっています。

問　地球人が宇宙人にさらわれたことがありますか。

答　私が知る限りでは、ありません。高貴な宇宙人はそんな事をやりません。宇宙人と一緒に地球を離れる地球人は自発的にそうするのです。時には円盤が着陸した場所へ行ったり円盤の内部を見せてもらったりする人々もいますが、こんな場合にはていねいに招じ入れられた人が理解不足から当然のこととてひどく驚いたりすることがあるので、宇宙人は本人の心中からこの体験の記憶を消してしまう必要が起こることがあります。これは非常に驚き恐れた人々の個人的安全を保つために行なうのです。前述のように、恐怖した人というものはあらゆる種類の珍談を作る傾向があるからです。

問　円盤がわざと飛行機に衝突したことがありますか。私はマンテル事件のことを意味するのですが——。（注＝むかし米空軍のマンテル大尉は戦闘機を操縦中に円盤を発見し、これを追跡中にバラバラになって墜落した。円盤現象史上有名な事件である）

答　宇宙人はバカではありません。彼らはわざと自殺行為を楽しんだり円盤を失うようなことはしませんし、地球人のだれをもきずつけることはしません。彼らのエレクトロニクスの知識はものすごく進歩していますので、自動操縦装置その他の機械的な失敗はほとんどゼロです。しかし円盤に故障が起こった場合は母船から磁気的な原理にもとづいてコントロールされます。飛行機同士の空中衝突が起こるのは事実ですが、これはおそらく悪天候、航路の混雑、軍の超音速機の不注意によるものでしょう。マンテル事件の場合は宇宙人が非常に残念がった事故です。マンテルは円盤に接近しすぎたために機体も肉体も円盤のフォースフィールドのネガティヴ放射線によって即時に分解しました。アダムスキー氏はこの件について〃空飛ぶ円盤同乗記〃で述べています。

問　宇宙人の〃死〃の概念についてもう少し説明して下さいませんか。

答　彼らは生命は永遠であることを知っているので、〃死ぬ〃ことを恐れません。一軒の家（肉体）から移動するエネルギー（生命）は別に新生した肉体を通じて現われるだけです。地球で〃死〃と呼ばれるこの過程は、実際には新しい肉体中へ英知またはエネルギーが転移するにすぎません。ゆえにそれは〃生命の連続〃ともいうべきものです。生命が永遠であるという事実を知るには、我々のどの部分が肉体的すなわち〃死すべき運命をもって生じたもの〃か、どの部分が永遠であるかをまず理解する必要があります。真の〃我〃は肉体ではなく魂の英知であって、それが肉体を建設し維持しているのです。たしかに我々のエゴの心はこの世と肉体に属するものであるために死滅しますが、肉体の太陽神経叢の下部にある魂の英知は絶対に死ぬことはありません。生命自体は死なないからで、さもなければ生命とはならないでしょう。宇宙の魂、神、天の父等、これらの名称のすべては同一のものを意味するのであって、これは宇宙の英知であり、存在物すべての建設者、創造主です。

人体を子細に研究すれば無数の細胞から成り立っていることがわかりますが、各細胞自体は完全な実体です。科学では各細胞はエネルギーのスパークすなわち英知によって導かれ維持されていることが判明しています。細胞が肉体中で破壊されるときはいつもこのエネルギーのスパークが別な新生細胞に乗り移り、その際過去の体験と生活の印象とも持ち運びます。そうでないとしたら人間は過去の進歩の記憶のすべてを失ってしまうでしょう。また科学の立証によれば、肉体中の全細胞は七年ごとに生まれ変わるということです。そうなると我々は肉体中に生命の連続が起こっているという確証を持つことになります。細胞から細胞へ、肉体から肉体へ転移する生命の連続は同じタイプの過程です。そうすると、なぜ地球人は前生の体験を思い出せないのかということになりますが、これは人間は自分自身のエゴの犠牲者なのであって、このエゴが〝因〟でなく〝結果〟だけを認めたがるからです。人間のエゴは自分の内奥の真自我——個人としての意識である生命のスパーク——からやってくる印象類をほとんど受け入れようとしません。我々も宇宙人と同じ能力を持っているのですが、大抵の人がそのことに気づいていません。人間は自身の内部以外の場所で知識を求めようとしています。人間は自分自身の諸問題によって大いに楽しんでいるので、もし諸問題がなければ自分でそれを作り出します。実際、人間は一日のほとんどの時間を利己的想念で楽しんだり物質的な財産を集めたりすることに多忙ですから、心身をリラックスさせたりチャンネルを開いて肉体内部の宇宙の英知から来る印象を感受したりする余裕はありません。この〝余裕を持つこと〟にのみ永遠の生命に対する解答があります。それは受け入れようとすればすぐ手に入る解答です。（第十章未完。以下次号）

空に浮かぶ！日本列島が中に

この一月三日夜は近来になく楽しいひとときをすごした。秋葉原で電気器具店を経営される実業家の山田氏とその社員久松氏、お二人の友人高木氏の三名とかねての打合せどおり夜十時に新小岩駅付近でお会いした。新春のこととてゆっくり落ち着く場所がないために小さなスシ屋へはいる。

初対面ながら三人ともきさくな、しかも立派な方であり、なによりも円盤問題—特にアダムスキー問題に異常な熱意と深い知識を持っておられるのには驚いた。三人とも円盤をしばしば目撃されており、簡単な図面なども用意しておられて、各自の目撃体験の説明は微にいり細をうがつ詳細なもので、お話によると高尾山近辺、多摩川沿岸の府中市一帯—特に競馬場付近、それに草加市あたりでは円盤がザラに出現するという。編者が持参したGAPの写真資料を見ながら口々に感動の声を発せられ、特に金星人オーソンのカラー肖像画を見ては「やあ、これを見ると永遠に若返るような気がする。すばらしい！」と久松氏。スシ屋の若い板前さんまでがのぞきこんで「宇宙人は絶対にいますよ」と真剣な面持で合づちを打つ有様。周囲のお客さんたちがこの騒ぎを何事かとふり向いたりする。

三人とも特殊な能力をお持ちのようで、久松氏は一種の霊眼が発達しているらしく、ときたま他人のオーラ（からだから発する霊光）が肉眼に見えるそうで、「GAP総会のときに久保田代表のからだから金色のオーラが出ているのが見えました」といわれる。山田氏のオーラも見えるのだそうで、先般来日したジーナ・サーミナラ女史の金色のオーラは圧倒的にすばらしく見えたとの由。

かずかずの興味ある不思議なお話のなかで特に注目すべきものは次のとおりである。昨年十月末頃、山田氏と久松氏の二人が都下の久留米町を深夜十二時ごろ自動車で走行中、雲一つない澄みきった天空に浮かぶ月におおいかぶさるようにして、突如奇妙な雲が出現しているのに気づいた。それはまったく日本列島をそのまま再現した雲—というよりもまさに巨大な日本列島の地図そのものであって、その地図を裏返しに見た形となってあらわれていた。北海道の先端から九州の南端まで輪郭が実に鮮明であって、ただぼんやりと日本列島らしく見えるというようなしろものではない。しかも驚いたことに列島中の山脈の起伏がそのまま濃淡になって現われている！富士山の個所は中心が濃密な点となって周囲にゆくにしたがって薄れているといった工合。房総半島などはあざやかに確認できた。

すると数秒後にこの〝雲〟がフワフワと落下するような調子でくずれてアッというまに消えてしまった。ア然とした二人はしばしロもきけない状態でぼう然となったけれども、なぜこのようなものが見えたのかさっぱりわからぬまま今日に至った。絶対に幻覚ではないという。「数日後、夢のなかで日本の国土がものすごいアラシに襲われる光景を見た」と久松氏。なにか日本の運命を暗示した予感ではないかというのが一同の感想であった。世の中には不思議な事があるものだ。

（編者）

私の想念観察法

想念観察法！　この五文字から成る簡単な自己訓練法こそまさに我々地球人をして飛躍的に昇華せしめる秘法なのであるとジョージ・アダムスキーは説く。なぜならば地球人のなかの如何に柔和な人といえども怒らせるのは簡単だとスペースブラザーズが言うとおり、地球人が地球上のカセから脱却できずにもがき苦悩するのは感情の抑制の不如意に起因するからである。感情の抑制！　これほどに重要かつ高貴なる自己発達の手段はない。地球人が外界に対して感情的ー分裂感情的反応を示すほど未発達な動物性を顕現するにほかならないのだ。

感情を抑制するのに他力本願的態度は絶対に不可である。自己の想念感情の内容や変化については自分自身に責任があるので、その始末は自分自身にのみかかっている。そしてそのためにこそ想念観察法が決定的なキイとなるのである。想念観察とはつまるところ自己精神分析であって、自身の精神を高次化する場合の不可欠なプロセスである。これを経ずして我々は自分自身を知ることは不可能なのである。

本編では想念観察の体験記三篇を掲載して読者の参考に供することにした。前二篇は試行錯誤の連続によりセント（聖者）の道を歩むべく超人的な努力を続ける人のさん然たる記録であり、我々の魂をゆさぶるものである。

1. 数取り器による想念観察法

藤原孝幸

GAPに入ってアダムスキー氏の哲学を学びながら次第に強く感じてきたのは想念観察の必要性でした。

アダムスキー氏の著書〝宇宙哲学〟には手帳による想念観察法が記されてありましたが、私の日常の仕事は大変活動的なものですから、とてもいちいち手帳に記入できるものではありません。あれこれ思いをめぐらせながらニューズレターの旧号を読んでおりますと、久保田代表の記事の中に数取り器による想念観察法が載っておりました。これを見出した時の喜びようは皆様にもおわかりになるでしょう。さっそく数取り器を二コ買いましてベルトの左右に取り付けました。右が高度な想念で、左が低い想念であります。

最初数取り器を腰につける時は勇気が必要でした。まわりの人達の自分に対する思いが気になったからです。しかし克服しました。小さな事にせよ、このような習慣的想念を克服して自分の信念をつらぬく事が進歩の秘訣であると思います。

さて、まったく初めての事なので最初はとまどいました。丁度勉強している時、ねむ気がさしてきた時のようです。観察してはしばらく忘れ、また気がついて観察するという調子でした。この時の想念観察は一ヵ月も続きましたが、その後数回、やったりやめたりしながらも、昨年のG

AP総会で刺激され、この時から本格的に観察を始めたのです。まずズボンのベルトとは別にベルトを一本用意します。これにちょっと手を加えた数取り器を左右に一つずつ取り付けて、これをガンベルトのごとく腰につけて観察するわけです。

この時、できるだけ人目につく所に取り付けるべきです。なぜならこうする事でより自覚が強まります。もちろん人目につかない所でもよく、重要な点は本人の自覚であります。

それで右を宇宙的想念、左をエゴ的想念とし、心中に高低いろいろの想念がわき起こるたびに左右に機械を押してゆき、一日の終りにその総数を記録します。ただ記録するのでは面白くありません。まず大学ノートの一ページと二ページを使って一ヵ月分が記入できる表を作ります。分類は、宇宙的想念、エゴ的想念、二つの和、二つの差です。これだけでもまだ面白くありません。今度は三ページと四ページをうまく使って三つの折れ線グラフを作り、一つに宇宙的想念とエゴ的想念を対比して記入します。もう一つに宇宙的想念とエゴ的想念の差を＋と－に分けて記入します。その日宇宙的想念が多ければ＋にそれだけ、エゴ的想念が多ければその数だけマイナスに記入します。最後の一つに二つの和を記入します。

こうしますと毎日あるいは一ヵ月の状態をひと目で見ることができます。そして四十九、五十ページに一年間の各月平均数を記入し、五十一、五十二ページに例のグラフで月別に月平均数を、宇宙的想念、エゴ的想念、その和、その差と分けて記入します。

重要な点はその日どのようにうまく想念を観察するかであり、グラフはその結果でしかありません。また観察する想念の数ではなくて、宇宙的想念とエゴ的想念の差が大変に重要であります。毎日観察を続けて日常の体験とからみ合わせ、その必要をより強く感じ、想念観察は宇宙的人間（人間すべてがそうですが）のなさねばならない義務であることに気づいて、そのように実行すべきです。

その時、短気は消えうせ、たとえ一日に一コしか観察できなくても、一ヵ月観察するのを忘れても、本人はかまわず記録し続けるでしょう。

より強い信念と、心の中での観察、選択、そして実行が私の目的であります。数取り器をはずしてこれが自動的に行なわれる時、本人は自由自在な人間であり、多くの事が可能になるのでしょう。

さて私が記録したグラフの結果を分析してみます。

★いままで一日に一番多く観察したのが、宇宙的想念四四一、エゴ的想念五〇二。

★観察しない日を除いて最少の日が、宇三、エ五。

★宇とエを差し引いてプラスの最高が一二一、マイナスの最低が二〇九。

★日々の感想の所を見まして二月二十六日は大変満足したのか「常に今日のようでなくてはいけない」とある。宇二五四、エ一八八、差がプラス六六。

★よほど気分がすぐれなかったのか十月十七日は「最低の日であった」宇一九、エ二〇、差がマイナス一。

★観察の低下、エゴ的想念の多い日が続くと肉体の故障を起こす。

★反覆想念、やる気ある観察、薬で再び健康。

★一年間の月別一日平均数（一ヵ月の想念を全部足して三一で割ったもの）で宇宙的想念の多い日が一つもなし。

★反覆想念が、観察あるいはその日の生活態度に大きな影響を与える。

以上の調子です。この中で私が最も注目する点は、十二ヵ月の間宇宙的想念の平均数がエゴ的想念の平均数より多い月が一つもないことです。

あきれるやら、はらがたつやら、この男は何のために生きておるのか、ブレーキをかけながら自転車を運転しているようなものです。逆に言えば人間の想念すべてが調和ある宇宙的なものになったらどうなるでしょう。私達の周囲を見ても自己訓練ほど興味深く価値あるものは他にありません。自己訓練によって生活のあらゆる面がよくなるでしょう。ア氏は最良の自己訓練の方法として「できるだけ多くの人々に奉仕をしなさい」と言っておられますが、これは実に良き方法です。私達は多種多様な表現と同時に責任をも持ちますし、積極的に考えるならば責任とは活動のエネルギーです。私達が多くの面でより大きな表現の場に立たされる時、今まで以上に今の自分（心）の無力さを知り、今まで以上に内部の宇宙意識に頼りますし、また頼らざるをえない、これこそ最良の自己訓練であります。ですからどのような良き表現にせよ、できるだけ責任ある位置につくよう努力すべきです。各人宇宙意識の現われであり、不可能な事は何一つありません。ただ不可能だと思うその思いを捨てればよい。人間が不信な想念をいだけば法則としてそのごとくになり、信じれば法則として信じるごとくなる。できないから不信感を持つのではなく、不信感を持つからできないのである。常に積極的想念を持って生きよう。内部の意識に従いながら。

人間はその存在の場だけを考えてもまず宇宙意識があり、そして心と肉体がある。私の中に宇宙意識があるのではなくて、宇宙意識の中に私がいるのである。人間がこの事を自覚する時、すべての迷いを忘れ、幸福のなかに生きるようになる。宇宙意識こそ人間であり、ただ宇宙意識のみがある。私達は幸福を求める必要はなく、幸福をかみしめる必要がある。

以上、私のつたない体験記といたします。（二二才。建築技術者、GAP幹部）

2. 自由は必ず来る

市川　宏

アダムスキー著〝テレパシー〟を初めて手にしたのは昭和四十一年二月九日、ふるえる感動と共に長年求めていたのはこれだ！と直感しました。あの時の胸の高鳴りは今でも覚えております。しかし肝心の想念観察の所は単に読み過ごしてしまいました。入会してから〝宇宙哲学〟を求めまして、最後に同じく自己訓練法があるのを見て、何とかしなければと思ったのですが、実行はなかなかできませんでした。ただ自分には空想癖があることははっきりわかっておりました。

想念観察手帳をつけ始めたのはいつごろかよく覚えておりませんが、ともかく実行しなければ何にもならないと「自分の気持をつけ始めます」と書いているうちに、怒りっぽい自分、性（セックス）の念に悩まされる自分というものを発見しまして、これが自分の傾向かとわかりだしてきましたので、その特徴に従って、空想癖を中心に大別してこんな欄を手帳の片方に作りました。

危（危害の念）
A（怒りの念）
FA（空想して勝手に怒る）
F（空想）
FX（空想上の性的想念）
X（性欲）

これで時間の経過に従って○印をつけ始めますと、私の性癖は全くこの通りで、これ以外の何物でもない。おれは何とイヤラシイ人間なのだろう。一日中こんな事を考えているのか。自分は正義漢だと思っていたの

に、要するに怒りっぽい、つまらない人間なのか、これがおれの正体なのかとガッカリして、全くなさけなく、意気阻喪してしまいました。しかし同時に、自分を直視する想念日記の重要さに気がつきました。こんなにはっきりと自分をさらけ出すものはありませんので、自分の実体を直視する勇気を必要としましたが、記帳する努力は続けておりました。時には激烈な感情の理由を簡単に記入しましたが、むしろその怒りの念を手帳にたたきつけて憂さを晴らしていたようです。それでも一週間や十日を飛ばすことは再三で、三月から六月に飛んだこともありました。

はっきりと思い出せるのは昭和四十四年九月の東京における日本GAP総会のころです。この少し前ごろから想念を種類ごとにグラフであらわしてみましたが、こんなイヤな考えばかり表にしたって何になるんだとやめてしまいました。総会に出席して精神が大いに高揚し、帰りの汽車の中でひたすら心の中を見つめていますと、何か考えているのでハッと気をとりなおしてまた観察していると、いつのまにかまた考えている。時計を見ながら調べますと一分ごとに想念がわいています。それを一つ一つチェックしてゆきます。帰りの車中ずっと続けておりました。おかげでこの時は自分を見つめる良い訓練になりました。

次第に慣れてきまして、注意深く観察するようになりますと、記入する数は増える一方で、うんざりして、なんてイヤなやつだろう、また妄想か、また怒っているのかと自分を叱咤しつつ、時には顔をたたきながらチェックを続けておりました。〃生命の科学〃の第九課で習慣細胞の事を知りましてからグンと理解が深まり、新しい手帳に変わってからはその書き方を変えてみました。

今度は手帳を横にして上下に使います。自分ではこれを天と地にみなしております。チェックの方法は、この想念はどこから来たのか、目か耳か、習慣細胞かと発生個所を探りながら、後に数をかぞえやすいように「正」の字を書くようにしてゆきます。この努力を続けておりましたら今年の八月六日、なぜか急に自信がはっきりとわいてきまして、もう逃げないぞ、毎日続けて書けるんだという強い確信が体中にみなぎってまいりました。

天	指向性 〃意識〃または〃因〃の方へ心を向けている気持	愛	一体感	意識拡大 (46年9月27日)					
地	細胞	目	耳	口.鼻	計				
	11	18	2	0	31	計			
	丁	正一			10	他(その他)			
	丁	丁	一		9	不(不満が先、不快感)			
	丁				2	X(性的想念)			
	一	下			4	A(怒りの念)			
		下	一		4	危(危害の念)			
		T			2	批(批判)			

書く項目は前と大体同じですが、「その他」の欄には「酒が飲みたい」「マンジュウが食いたい」と思った時には「口」の横にチェックをし、「スポーツ新聞を読みたい」と思ったら「目」の横にチェックします。すると毎月読まずにはおれなかったプロ野球への執着もいつしかなくなってまいりました。

久世先生の言われるように意識を宇宙の〃因〃の方へ向けるよう心がけましたが、そう思っていてもまたいつのまにか他の事を考えている日の方が多くて困りましたが、時には天を仰いでその奥の目に見えない〃因〃の方へ心を向けるように自分の意識を持ち続けようとしました。そ

の努力が次第に芽を伸ばしたのでしょうか空想癖がなくなっているのに最近気がつきましたので、その欄は削除しました。また批判も数は少ないのでこれもAの欄と合併しました。これらのチェックによって心の悪癖の一つ一つが取り除かれてゆくように思われます。

さて男にとって性欲というものはおさえればおさえるほどその反動はものすごく、手のつけられないほどあばれます。ちょうど思春期に何かはわからないけれども頭がボーッとして、その頭を柱にぶちつけたい衝動にかられたあの思いに炎をかけたような状態で、手帳に書いても書いても炎は消えず、その数は一向に減りません。朝の通勤電車の中でも手帳を片手に、久世先生の「より高く、より高く」を思い出しながら必死の努力を続けておりました。しかし性欲の高まった時には如何ともなしがたく、夜、床の中で妄想がおきますと片手を伸ばしてマクラもとの手帳にチェックします。手をひっこめるとまたすぐチェックしなければならない有様で、頭の中は情炎に燃えて理知のかけらもありません。朝は夢うつつの中でチェックしながら悶々のなかに起き上がる惨憺たる思いの連続でございました。

今年の九月二十七日に「性の欲念はとれた」という感じがいたしました。しかしまだ不安だったので夜眠る前に「明朝はもう何の欲念もおきないぞ」と自分に言い聞かせまして床につきました。すると翌朝は実にスッキリしたすがすがしい朝で、それからの毎日の快適なこと！

「ついに性のドレイから解放された！」と思いました。その時はあっけなく簡単にとれたものですから、その感じがした時には「おやっ！」と思っただけでしたが、次第にその重大さに気がつきまして、こんな事ができるのか！ とビックリしました。この方法を教えてくれたアダムスキーには感謝、感謝！ アダムスキーを知らせてくれた久保田先生にはなんとお礼を申しあげてよいやら言葉につくせぬうれしさでございました。その後時折脳裏をかすめることもありましたが、これは残りカスのようなものであろうと思っておりました。

ところが十月十四日にふたたび性的想念がわき起こり始めました。猛烈きわまる連続的な攻撃です。以前の私ならひとたまりもなく降参してダウンしてしまうところですが、今度は負けません。ひたすら手帳を片手にチェックします。私という人間は前と少しも変わっていませんし、急に意志が強くなったわけでもありませんので、やはりその〝性（セックス）〟の何か根本的なものがとれたのだと思います。けれども生きている限りその機能はあるものですから、思春期以降三十余年の習慣細胞が刺激を与えてくるのではないかと思っております。その波状的な攻勢は十一月下旬から急速におとろえて、以外に早く肉欲から離脱し得たさわやかな平和が訪れてきたようでございます。

最近〝生命の科学〟を読み返しまして、第八課で「あなたが体験するかもしれない各種の感じに・・・」と親切にも助言してくれているのに気がつきました。その他いろいろの助言もすべて前書に書かれた、自分の想念を観察して手帳に記すという浄化方法をとってこそその意味がわかり、また体験的に進歩の状態がからだでつかめるのではないかと考えます。ともあれアダムスキーの進歩過程の一部を体験し得た今言えることは、この記録の実行という前提があって始めてアダムスキーの著書は指導書としてさんぜんたる光を放ってくるように思われます。ペンは剣よりも強しと申しますが、ペンの力がこれほど偉大だとは思いもしませんでした。すでに偉業をなしとげて〝因〟に帰ったアダムスキーに感謝しつつ、なおも想念観察記録を続けている次第でございます。（四九才。会社員。日本GAP大阪支部代表）

3. 世の中を憂しと思えども

久保田八郎

アダムスキーの哲学は難解だといわれるが、理論的には簡単なことなのであって、むつかしいのはその実行である。ア氏によれば人間はセンスマインドとソウルマインドの複合体であり、前者はエゴに満ちた肉体の心、ニセモノの自我で、これは主として眼、耳、鼻、口の四種の感覚器官から形成されるのであって、肉体の死とともに死滅するが、後者は宇宙的意識、生命、英知であり、人体を維持する根源的なパワーであるという。一般人は後者の存在に気づかないで前者のみに頼って現象としてあらわれた結果の世界だけを見ようとする。そのために判断に狂いが生じたり分裂感情を起こしたりしてトラブルの絶えない生活が展開し、他人に対する不信感が増大するために、身の保全を図るための強力な武器として金や物的財産にのみ執着するようになり、人生の醜悪な生存競争に疲れ果てて悲歎の涙にくれながら、世の中を憂しとやさしと思えども飛び立ちかねつ鳥にしあらねばというような哀歌が人間の心情をあらわすものとして古今変わることなく語りつがれたりする。我々に言わせれば、飛び立ちかねつ円盤持たねば、というところだろう。

このような不幸な状態を解消するには今まで人間が頼りにしていた全く不安定なサル知恵にすぎないセンスマインドを宇宙的なソウルマインドと合体させて、単なる人間知恵でなく宇宙の意識の指導によって生きることが根本的に重要で、これは人間の義務といえるものである。しかし多数の宗教や精神修養団体はこれと類似した教義をとなえているのでこれだけのことなら、ナンダただの道徳律ではないかと無視される向きもあるだろうが、アダムスキー哲学が他の道徳再武装運動類と全く異なるのは想念観察法というものを教えた点にある。これはア氏の著書〝宇宙哲学〟に簡潔に述べてあるのでご存知だろう。終日自己の心中にわき起こる想念を絶えず観察して一日のうちに自分がわきおこす宇宙的なポジティヴな想念と非宇宙的なネガティヴな想念とをかたっぱしから手帳に記入し、一日の終りにその計を出して両方を比較検討する。これを毎日行なうことによって次第に非宇宙的なエゴ想念をなくしてゆき、センスマインドを宇宙の意識のなかに吸収させようというわけである。実際にやってみるとわかるがこれはすばらしい方法であって、私の知る限りア氏以外にこのような方法を教えた先覚者はいない。

自分で自分の想念を観察できるはずはないという人もあるが、それは誤りで、ヴントやジェームズらによる初期の心理学はイントロスペクティヴ・サイコロジー（内観心理学）と称せられる想念観察を基盤としたものであった。しかしこれは求道的性質を帯びたものではない。

ここまではわかる。実によくわかるが、問題はその実行である。ずっと以前、私はこの想念観察記録を実行するにあたって朝の起床から夜の就寝に至るまで十分間ごとに想念を克明に記録してゆく方法を思いつき、これを毎十分想念観察法と名づけて数ヵ月間実行したことがある。これに関してはかつて本誌に手記を掲載したので、ご記憶の方もあると思うが、その結果はすばらしいものであった。ところがその後、もう大丈夫だと思ってやめてからまた逆もどりしたために、結局想念観察記録は終生続ける必要があると思うようになった。

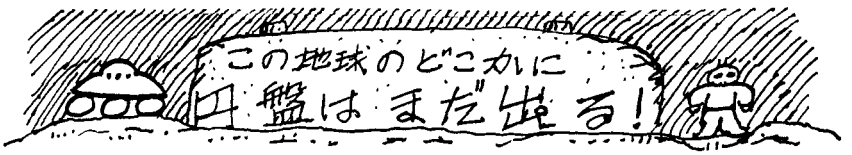
想念観察記録といっても想念内容を文章で詳細に書くのではなく、手

帳の左ページを非宇宙的想念欄、右ページを宇宙的想念欄として、左ページは更に憎悪、怒り、シット、利己的欲望、不親切等に分類したタテの欄を作り、右ページは万物との一体感、愛、奉仕感、親切等に小分けして、十分間ごとに区切った横ケイの中へわき起こる想念を種類別に該当位置に丸印をつけてゆくのである。したがってしばしば時計を見る必要がある。そんなことができるはずはないという人もあるかもしれない。たしかに職業によっては不可能な場合もあるだろう。だが私は当時教員であり、時間的に余裕があったし、熱烈な意欲に燃えていたために実行可能であった。もちろん授業中も教卓に手帳を置いて十分間ごとに記入してゆく。これは想念観察というよりも感情や気分の状態の間断なき変化に対する記憶の記録という方が正確かもしれない。だから英語の講義を行なっていればそれが宇宙的な奉仕精神にもとづいているか、それとも利己的なイヤな気分でしゃべっているかを観察して分類する程度である。

想念観察記録というのはただ記録するだけで事足れりとするのではなく、これを行なうことによって何よりも自己の内奥を客観視し、感情を抑制し、非宇宙的想念を次第に減少させて宇宙的想念を高めるのが最大の目的である。精神分析学的にみても自己の欲求不満などは直接自分で紙に書いてみるのが有効な方法だとされている。想念観察記録によってまず気づくのは自己を客観視する技術が向上してくることで、これは精神的進歩を目指す人にとっては重要である。なぜなら想念観察は自己精神分析にほかならないからだ。ところが一般人は自己を見つめるどころか自分の内部に巣食っている欲求不満やコンプレックスなどに気づくこともなく、その結果は心理学でいうプロジェクション（投射）の行為となってあらわれたりする。他人にあたりちらすことによって不満を解消しようとするわけで、このような現象は人間世界の至る所に見られるのである。換言すれば、この地球上の社会は人間のエゴと抑制されない感情とによって形成されていると言えるだろう。アダムスキーが伝えたスペースブラザーズの精神の状態は我々の想像をはるかに超えた全く次元の異なるものであるらしく、よくはわからないが地球人の感情の動きが奇異なものに映るようである。つまり我々は混濁した水中であがいているのに彼らは清澄な空気を吸っているというようなものだろう。この水中から飛び出るための突破口はやはり想念観察による内省にあるだろう。

アダムスキーによれば、想念観察によって浮かれ騒ぐセンスマインドを静めるのはテレパシー開発の重要な基礎段階であるという。人間の本質は触覚的要素を持つので、たしかに外界から来る波動を肉体中の鋭敏な感受器官がキャッチしようとする場合、心中が〝話し中〟であれば感受は困難となってくる。そこで例の四つの感覚器官——人体の最外層にある触覚器官の尖兵——のコントロールから始める必要があるのだが、これがなかなかむつかしい。他人の分裂感情に対してS—Rの法則により反応を示すのは内奥のソウルマインドではなくて眼や耳を通じて形成されるセンスマインドであるから、これらの受容器を中立化せしめることが第一に重要であるとア氏は説く。たしかにそうであろうし、すばらしい理論であると思われるが、この実行は想念観察による精神分析的方法によるより他に妙案はない。語学の習得に王道がないのと同様に魔術的方法によって瞬時にしてセンスマインドをソウルマインドと一体化させることは不可能である。やはり自己の想念を忍耐強く観察し記録して分析しながら少しずつ前進を図るほかはない。しかしいつかは強大な我欲細胞兵団が崩壊して自我帝国も消滅するだろう。そうありたいものである。（四七才。日本GAP代表）

UFO 夜話三題



フィンランド山中に着陸した円盤

一九七一年二月五日、フィンランドのキンヌラの二人の青年ペター・アリランタ（二一才）とエスコ・ジュハニ・スネク（一八才）の二人が眼前に円盤が着陸するのを見た。

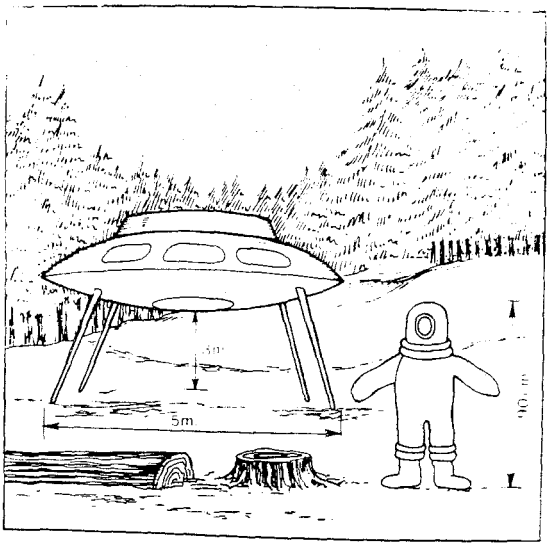
二人がキンヌラのカンガスキラ村の森林中で働いていた午後三時ごろ、仕事を終えることにしてアリランタが電動ノコギリをとめたとき、突然一個の奇妙な金属ようの物体がまっすぐ降下してくるのをみとめた。それは二枚のサラを合わせたような形で、直径約五メートル、下部には二メートルあまりの四本の着陸脚がある。すると物体は二人から十五メートルばかり離れた地上に着陸した。

人間がすべり降りたこと

降下中に物体の底部の中心に丸い穴があらわれて、ここから不思議な小さな人間らしきものがすべるように出てきたのである。まったく二メートルの空間をフワーッとすべるように降りたのだ。そしてアリランタの方へ接近してきた。動作はぎごちなく、歩間はみじかい。宇宙人かロボットのように見える。身長は約九十センチぐらいである。からだは緑色の上下続き服につつまれている。頭部もつつまれていて、その中心にはレンズ状のものがついていた。両手は丸くて指などは見えない。長グツも服から続いていて、緑色である。

怪物は奇妙なかっこうで雪の上を歩く。あまり雪の中へはまりこまない。これがゆっくりアリランタの方へ近づくにつれて、アリランタも電動ノコのスイッチをいれて手にしたまま相手の方へ接近して行った。このときエスコ・スネクもアリランタのモーターの音でふりむいてやっと不思議な事件に気がついた。

小さな緑色の人間とアリランタはたがいに近づいて、いまやその距離は十メートルたらずとなった。すると相手は急にくるりとからだをまわして円盤の方へ歩き始めた。それでアリランタは勇気が出て、ひっとらえてやろうと飛び出した。円盤の内部には他の人間たちがいるのが見えた。機体の上部には三個の窓があり、右がわの一個の窓を通して三人の〝人間〟がいるのが見えたが詳細はわからない。



相手をつかまえたこと

円盤から三メートルばかりの所でアリランタが相手をつかもうとしたとき、相手は奇妙な動作で空中に浮かび上がり、あの丸い穴へ上昇した。そのときアリランタは急速に手をのばして相手の右足のカカトをつかんだが、すぐに手を離した。手が焼きつくような感じがしたからだ。（このときのキズは二ヵ月後もはっきり残った）相手はそのすきに穴の中へはいりこん

でしまった。

手にヤケドしたこと

円盤がかすかなうなり音を発し始めた。ゆっくりと地面から離れて上昇する。アリランタは弱い空気の流れを感じたが煙やニオイはない。円盤が上昇すると底部の丸い穴がとじられて、十五秒たらずのうちに物体は空中に消えてしまった。

二人によれば、着陸していた時間は少なくとも三分間である。消えたあと二人はあまりの驚きに口もきけなかった。からだ中がこわばって動くのが困難だったが、一時間もしてやっと歩けるようになった。

事件後二時間もたってから二人は家に着いて出来事を話したが、だれも信じない。でっちあげだとみんなは思ったらしい。アリランタはたしかにヤケドをしたのだが、これは別な事故ともとれる。翌日アリランタのキズはひどくなったので、オノを持つことができなくなってしまった。だが二人は森の中へ仕事に行った。異常な形跡はなかったが、仕事ははかどらない。オドオドしてあたりを見まわしていたからだ。やがて恐怖は消えたが、アリランタは夜の一人歩きをこわがるようになった。

しかし同地域で発生した円盤事件はこれだけではない。同日キンヌラの別な場所でUFO事件が発生しているし、一九七一年の冬にはキンヌラの多数の人がUFOや不思議な光体などを目撃している。目撃者はやはり他人から信じてもらえないという。

ペンシルバニア州の円盤降下事件

一九七一年四月十四日の午後八時、アメリカはペンシルバニア州で円盤降下事件が発生した。目撃者はこの事件の調査者で円盤研究家のロバート・シュミットの妻のイトコにあたる二十八才のマリオンという女性と、その許婚者のまじめな青年デニスの二人である。

そのときデニスはエバンス市からピッツバーグにあるマリオンの家へ彼女を送って行くために車でドライブしていた。

二人がピッツバーグとバトラー間にあるキャラリー化学工場のそばを通過した時、まずマリオンが空中に異様な物体を見た。その物体は車と同じくらいのスピードで同じ方向に進行していた。距離は車から約百ヤードである。輝く黄白色で、女は飛行機かと思っていた。しかし窓をさげても音が聞こえない。マリオンが騒ぐのでデニスは車のスピードを約十マイルにおとした。そして彼もその物体を見た。

「その物体はわれわれの右手の山の輪かくにそって等距離を保っていた。まるでレーダー装置を用いているかのようにみえた」とデニスはいう。

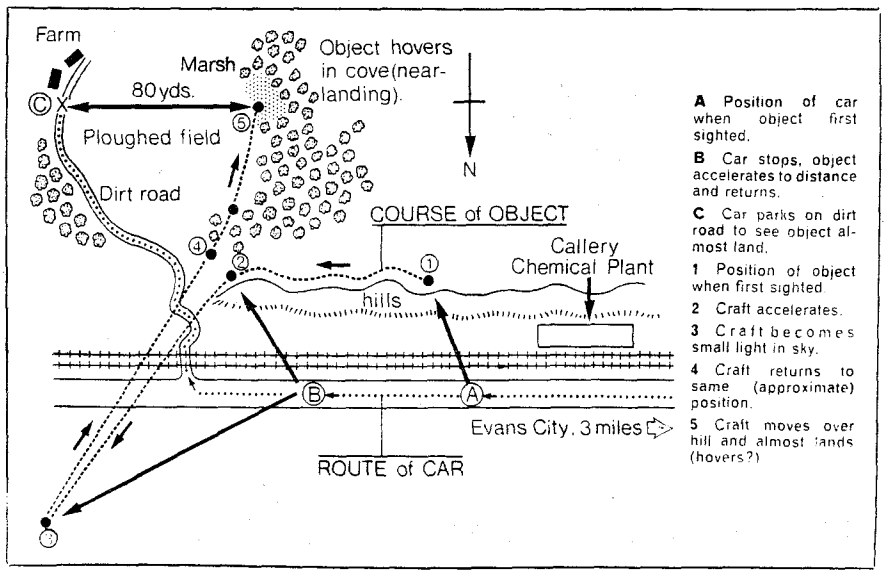
二人ともべつだん不快な気分はおこらなかった。

デニスは続ける。

「ガケの方へよってエンジンをとめると、物体から音が響いてくるのが聞こえた。するとそれは山の上空の位置からひょいと離れて小さな光点となり、木星くらいの輝きになった」。

まもなく物体はもとの山の上空に帰ってきて、ふたたび大きくなった。

そのUFOは二個のおワンのフチをくっつけ合わせたような形だが、下部よりも上部がはっきりしていた。全体がケイ光を発

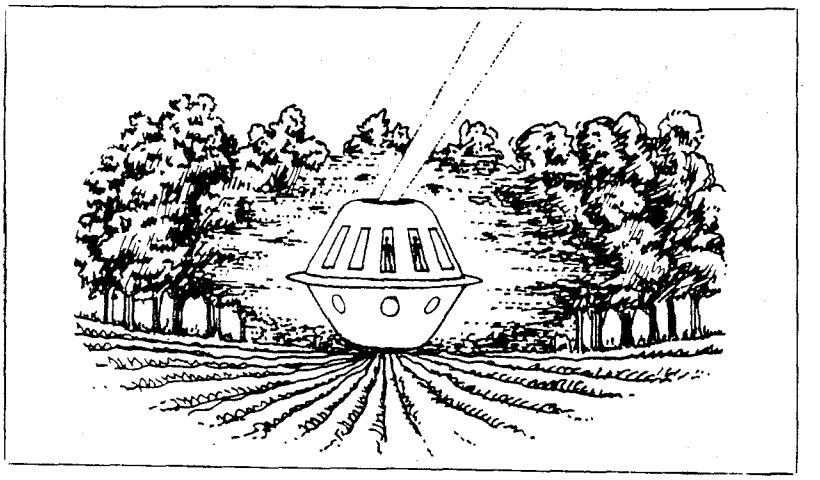


している。ニオイも音もなにもない。

円盤を追跡する

すると物体は大きな山の上をこえてまわったように思われた。そのとき山のむこうがわへ降下したようで、見えなくなってしまった。

デニスはなんのトラブルもなしに車をふたたび動かして進行し、きたない道路との接合地点へ来た。このせまい道は右へ折れていて、ペンシルバニア鉄道の線路を横断している。



マリオンはおそれおののいて物体を追跡したくなかったが、冒険好きなデニスは物体を見ようとして小道へはいることにした。そしてまもなく山端にUFOがいる所へ到着した。このとき物体は地上数フィートの空間に停止していた。ある農家の畑の下り斜面上の約八十ヤードむこうである。

デニスは前進し続けて、一軒の農家と納屋の所へ来たが、家は暗くて納屋のそばに小さなともしびが見えただけである。

「だれかが家にいて、われわれといっしょにこの物体を見てくれればよいと思ったが、だれもいなかった」

円盤、よいニオイと光線を放つ

畑のむこうに森があって、円盤は高いカエデの木でかこまれた〝奥まった所〟に降りて、地面上に浮かんでいる。デニスは円盤と地面とのあいだに光が見えたので、浮かんでいたと考えている。

マリオンの話によれば、空気がよいニオイとなり、雨後のように清浄だったという。

「われわれは二本の木の近くの道路上に車をとめた。そして物体を見つめていたときに何ともいえぬよいニオイがしてきた」とデニス。（それまで数日間は雨がふらなかったことが後に判明した）

物体はなおも黄白色に輝いていて、そのまわりに霧のようなものが見える。これは二十ヤードむこうにある小さな沼地の蒸気のせいではなかったかという。

デニスの見たところでは、物体は径約二十五ないし三十フィートで、高さは二十フィートである。

このときの時刻は午後八時二十分。空は完全な暗黒ではない。樹木のアウトラインがシルエットとなって星空に見えた。円盤に近い樹木が機体によって照らされることもない。すると一条の白色光線が物体の頂上から放射されてまっすぐ上方に伸びたのである！

乗員が見えた

デニスは続ける。「物体には上部に数個の窓があった。タテに細長い形の窓だ。下部にも三個の丸い窓があった。上部の窓がいくつあったかさだかでないが、少なくとも四つはあったと思う。それらの内部に赤色の光がもれて見えた。SF映画のコンピュータースクリーンに動いて見えるようなチラチラする光だ。

窓の中の人影を最初に見たのはマリオンだ。人間みたいで、二人いた。

それらは大きな人間で、身長約十フィートあっただろう。二つの窓に黒い影となって立っているんだ。これを見て好奇心が恐怖に変わったね。暗い道を一目散に逃げたときも円盤はまだ同じ位置にいた」

翌日UFO研究会のメンバーたちがマリオンとデニスに同行して現場検証を行なったが、疑わしいフシはなく、事実の事件と断定された。ただし二人のフールネームは都合上秘してある。

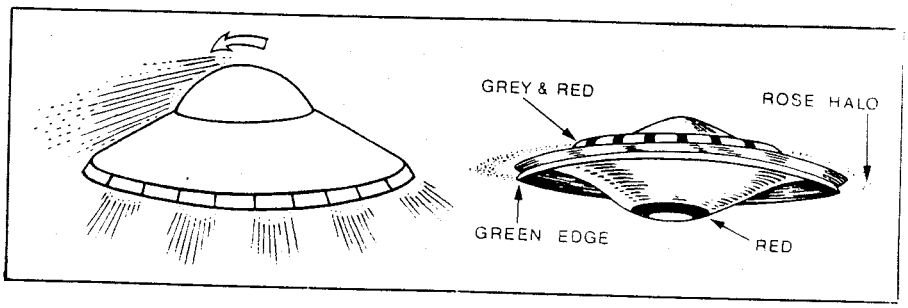
スエーデンの円盤撮影事件

一九七一年四月三十日の午後七時四十分から五十分までのあいだにスエーデン南部とデンマークで数度の円盤目撃事件が発生した。これは当時大きな話題となり、円盤研究家連をよろこばせたが、更に五月六日の午前九時五十五分にすばらしい円盤写真が撮影された。

撮影者はスエーデン人ラルス・テルン氏（二五才）である。そのとき彼はオートバイに息子のステファン（四才）を乗せてス

キリンガリードの北東五キロの射撃場の所にある小道を走っていた。

そのとき彼は奇妙な物が北東に飛ぶのを見た。オートバイをとめて、よく見ようと

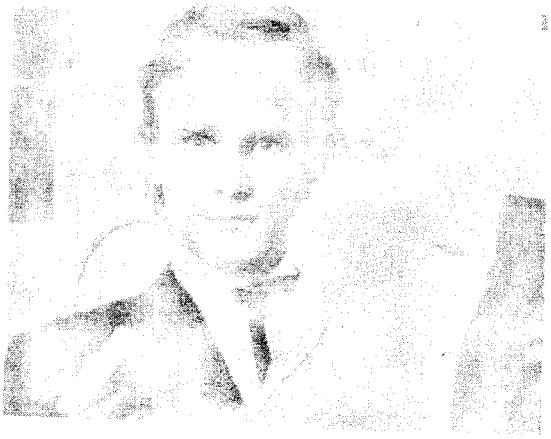


二十メートルばかり走ってゆくと、J—三五戦闘機に似た飛行体が降下して空中に停止するのが見えた。

日本製カメラ、活躍す

彼は都合よく持っていたカメラをポケットからひっぱり出して、円盤が静止していた一分間のみじかい時間中に二枚の写真を撮影した。このカメラは日本製のミノルタ16である。最初の写真は大あわてで撮ったためにピンボケになったが、二枚目はうまくいった。写真中右がわの黒い壁は高さ二メートルあまりの射撃場防御壁である。この写真のネガは後にゲーテボルグの研究所で百二十倍に拡大されて子細に検査されたけれどインチキだという証拠は出なかった。また明暗二とおりのコピーを作って、ワイヤーその他の道具が用いられたのではないかと調べられたが、そのような形跡は発見されなかった。二枚の写真は少し異なる位置からとられたので、これを左右にならべてステレオスコープで検査したところ、円盤は防御壁のはるかむこうで滞空していることがわかった。

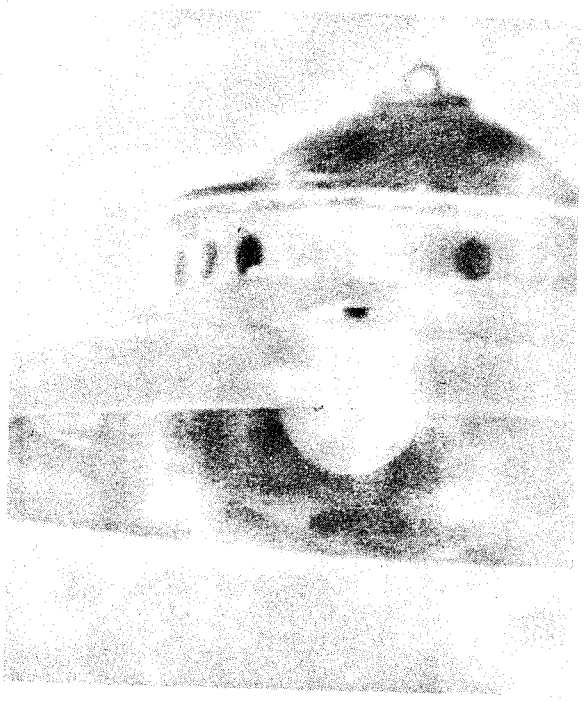
なお当日これとは別にある人によって同地域でUFOが近くで目撃されたという事実があった。



ラルス・テルン氏は語る。「物体は停止していたが、たえず前後にゆれていた。上部にはドームがあり、下部には少しつき出た部分があった。ドームのま下にグレーと赤の物が見えて、その下には緑色のリボン状のものがあった。底部は赤色だったか、そこからシュ！という音が十ないし十五秒ごとに聞こえた」

空飛ぶ円盤同乗記 改訳

ジョージ・アダムスキー
久保田八郎訳



訳者はしがき

本書の原書である Inside the Space Ships が一九五四年に刊行されて世界の円盤研究界に大ショックを与えたことは年輩の読者の方々の記憶に新しいだろう。訳者の手になる邦訳版〝空飛ぶ円盤同乗記〟が高文社から出たのはたしか一九五五年だったと思うが、二十年近い才月にもかかわらず現在もなお多数の読者の驚異と賛嘆の的になっている実情にかんがみて、既刊本の訳文の不備をあらためるために改訳に踏み切った次第である。既刊本では紙数の都合により省略した個所があったが、これも今回の改訳で補うことにし、訳文も平易な文体にあらためて全面的な改訂をほどこした。UFO体験記中代表的文献であり、はかりしれない価値を有する永遠の古典たる本書が、この改訳により読者に益するならば幸いである。連載完了後は立派な装丁のもとに一本にまとめて刊行する予定なのでご期待をこう次第である。なおアダムスキーの著書の日本語翻訳権はすべて訳者が所有していることを付記しておく。

＊本文中のカッコ内の〝注〟は訳者による。

●はしがき

シャーロット・ブロジェット

本書の内容についてはだれしも非常な魅力を感じるだろうが、ある程度の疑いも起こすだろう、と述べることによってわたしは〝はしがき〟を始めたい。人々のなかには宇宙船（複数）内における体験は真実なのだというジョージ・アダムスキーの主張を認める人もあるだろうが、彼は誠実に話していると感じながらも正直ではあるが神がかりなのだときめつけて、その不思議な経験を霊感や心霊のせいにしてしまう人も多い

だろう。また、身近な三次元の世界でまだ立証されていない物事ならすべて拒否するように教えこまれた人々は、アダムスキーの体験のすべてを巧妙なインチキだとかたづけるかもしれない。

わたし自身も数度の機会に宇宙船（複数）を見たことがある。その場所はわたしが住んでいるバハマ諸島とこの夏に数週間滞在したパロマーの両方だが、宇宙船の中へはいったことはない。またわたしの知るところでは宇宙人に会ったこともない。しかしジョージ・アダムスキーに会った。かれを知れば少なくとも一つの確信を持つようになる。かれは疑いもなく正直な人なのである。

Flying Saucers Have Landed（邦訳〝空飛ぶ円盤実見記〟）を読んだあと、いずれにしてもわたしは家族といっしょに夏をすごすためにカリフォルニアへ行くつもりでいたので、当地のわたしの目撃体験を述べた手紙を書いて訪問してよいかと尋ねてみたら、来てくれというていねいな招待状がかえってきた。

はっきり言っておくが、わたしは災難よけに指をしっかり組んでパロマー台地を初めて訪問したのである。異様な精神病者から害意のない神がかりにいたるまで何が出てきてもよいようにわたしはすっかり覚悟していた。それともこれは今をはやりの円盤熱に都合よく便乗したカリフォルニア州の一つの宗派なのだろうか。ところがわたしが見たのはこんなものとはおよそ縁遠い、むしろ何とも言いようのない一人の男であった。

わたしの最初の反応は、かれの著書 Flying Saucers Have Landed（邦訳〝空飛ぶ円盤実見記〟）のカバーにまったく不適当な、誤解をまねきやすい写真が用いられたのは少々拙かったということである（注＝ロンドンのワーナー・ローリー社版原書のカバーには写真ではなく円盤の俗悪な絵が描いてある）。アダムスキーは個人的に見ればハンサムな男であるのみならず誠実さをはっきりとあらわした立派な顔をしていた。また、そこに滞在した数週間のあいだに発見したことだが、これは親切さと忍耐の表情が決して消えることのない顔でもある。このことは卑小な人間たちの血圧を高めるようなささいなイライラがかれの場合にはまったく起こらないという意味ではない。それどころかシロウト鉛管工として働くときにパイプがいうことをきいてくれなかったり、愛用のハンマーを探し出すことができなかったりすると、かれも人なみの言葉を口に出すのである！　しかしかれのイライラはめったに他人におよぶことはない。かれの家へ行く人のいずれも――うるさ型、やっかい者、ケンカの押し売りであっても――世間的な意味での知的な魅力ある重要な人物が持っているのと同じ我慢強いていねいな態度を発見する。つまりかれは真の理解と同情心を持っているのである。こうした性質は常にそなわっているユーモアのセンスとあいまって、この上なくかれを親しみやすい人間にしている。またかれはだれにたいしても自分が信じている事や述べている事柄のすべてに同意してくれと要求しない。かれの謙譲さは尊大さをまったく持たない真の謙譲さである。

アダムスキーが正規の教育以上の知恵を持っているという事実はかれの場合には至宝であり、このためにときとしてアカデミックな精神をしばりつけてしまう足カセにわずらわされることもない。と同時にかれは世界中の出来事やその裏にひそむ原因など、ほとんどの問題について驚くほど精通しているのである。かれがいくらか予言者であるというのは、たぶん少しはこのためだろう。物欲がほとんどないためにときどき他人に利用されるという点をのぞけば、アダムスキーはなみはずれて均衡のとれた人として浮かび上がってくるのである。

アダムスキーによって示される〝忍耐強さ〟というすばらしい商標こそ、他の惑星から来るブラザーズ（宇宙人）によってかれが地球上の重要な密使（複数）の一人に選ばれた大きな一因であるとわたしは考えたい。アダムスキーの忍耐は炉辺か木陰で待ったり夢想したりするような安っぽいものではなく、行動によって裏づけられた忍耐である。たとえば、空中に見えた不思議な物体が地球以外の性質をもつことをひとたび確信すると、かれはその実在性について写真による証拠を得ることに着手した。これが壮大な計画であったことは明白である。

当然発生してくる天候と長時間という障害もアダムスキーを挫折させなかった。実に五年間（一九四八年から五二年まで）数百回の試みに失敗しながら、ついに宇宙船（空飛ぶ円盤）の写真数枚を撮影したのである。これらはかつてかれが見たことのある宇宙船のそれぞれ異なるタイプを示していた。そのときかれは自分の円盤研究の最初の段階が完成したと考えたにすぎない。それ以来世界各地でとられた（円盤の）写真類が公開されてきて、アダムスキーの写真の傍証として同じタイプの宇宙船を示している。

ＭＳＩＡ（注＝この意味不明）のレナード・Ｇ・クランプは、アダムスキーの金星型円盤とイングランドの十三才の少年スティーヴン・ダービシャーが撮影した円盤の比較投影図を作って両方とも構造と大きさが同じであることを証明した。この図面はクランプの著書〝宇宙・引力・空飛ぶ円盤〟に掲載されている。科学者や技術畑の人に一読をすすめたい（注＝ブリティッシュ・ブックセンターによって一九五四年に米国で出版された）。

パロマー台地を離れる前にわたしは次のような進言をした。どうしても〝具体的な証拠〟を求めたいという人のために、すでに安全な状態にあるかそれとも個人的な理由によって目下は沈黙する必要のない人たち（目撃者たち）にかわってなにかの証拠物件、たとえば宇宙船の内部の写真とか別な惑星で作られた物品の写真などを本書の中に加えたらどうかということである。こうした証拠物件はほとんど役に立たないとかれが感じている理由についてその説明を理解したものの、なおもわたしは証拠物件がないためにこれからさき多種類の友人知己から寄せられる反響について考えていた。この知人たちのなかには有名な科学者、ジャーナリスト、各種の学問分野におよぶ教授連、洗練されたシロウトなどがいるのである。

一般の人が空飛ぶ円盤についてわたしの予想以上に熱心な関心を示していることがわかっていたし、しかも空中に現われるこの不思議な飛行体の事実に関して驚くほど疑いがもたれていなかったばかりか、それが別な惑星から来るものだと信ずる用意があることもみられたが、ただ一般人に納得しかねるのはジョージ・アダムスキーが他の惑星から来た隣人たちに会って話し合ったり、かれらの宇宙船に乗せられたということなのである。

過去においては宇宙に関する広い知識が不足していたことはだいたいに認められていたが惑星間の有人飛行を不可能だとする宇宙空間の距離に関する概念はもう多くの科学者に支持されないし、光年という古い物差しも時間をはかる基準として役立たない。宇宙の流れ——適当な言葉ではないだろうが——はまだ文句なしに神秘として人間の探険を待っている。引力の征服という問題がなおも未来によこたわっているのだ。

日常生活において科学がたしかに長足の進歩をとげているからこそ、微生物のわたしたち人間は広大な宇宙に関する知識がまだ幼児のそれにすぎないことをときとして忘れるのである。わたしたちは人類の歴史を

通じて、明日のより大きな発見に照らし合わせて昨日の推測と結論の強硬な放棄または修正を命じるたえまのないパタンを見ている。人間の心が発達すればするほど、無限に創造されるたえまなき不思議な物事は、人間が工夫したいかなる物差しを用いても充分に測れないということを知るのである。これは血わき肉おどる自覚であって、恐ろしい意気消沈するような自覚ではない。ただ進歩しない心を持つ人だけが、自分の小さな肉体的体験の外がわかまたは貧弱な想像力による理解をこえて存在するものすべてを不可能事または怪異としてすぐにはねつけるのである。

歴史や人間性の一学究としてアダムスキーは、この悩み多い惑星上の平凡な出来事からみてまったく問題にならないものとして除外されるような体験を語るに際して、出そうなと思われる筋からの攻撃にたいして自分を広くさらけだしている。さらにわたしはかれの正気または真実さにたいしてむけられるかもしれないいかなる誹謗も個人的にかれを妨げる力をもたないことを知っているけれども、一方、宇宙船に関する事実や地球の分裂した人類にたいする宇宙船群の〝友好的な〟使命に関する事実を伝えるのにかれがどんなに努力しているかも知っている。以上の理由やら、アダムスキーの主張を立証する〝具体的証拠〟を求める多くの声に接したことなどから、その線にそった物を本書に掲げたらどうかとわたしはふたたび手紙でうながしてみた。それにたいする返事にはわたしや他の人が説明するよりもはるかに効果的にかれの意見が述べてあると思うので、許可をいただいてかれの手紙を引用することにした。

「シャーロットへ

非常な興味をもってお手紙を拝見しました。あらゆる異なった局面というものは一方で意味をなすように見えながら他方ではそうでもありません。わたしは他人を非難したくはありませんが、一つの特殊な分野で育成された人はほとんどの場合、本人の性格や地位のいかんにかかわらず伝統的因襲的な慣例をあまりに忠実に固守しています。

すでにおはなししましたように、わたしの宇宙船による（宇宙）旅行の一つについて二人の目撃証人がいます。二人とも地位の高い科学者です。ひとたびかれらが声明を発することが可能になれば状況は一夜にして変わるでしょう。しかしこのごろの物事はすべて安全というレッテルのもとに分類されますので、当分のあいだかれらは陰にかくれる必要があるのです。国家の防衛問題や自分自身を危機におとしいれることなしにかれらが持っている証拠を公表しようと思う時機がくれば、新聞を通じてそうするつもりだと言っています。それが間近にちがいないことはよくおわかりでしょう。しかしかれらはブラザーズ（宇宙人）の願いによりわたしのがわについてくれましたので、ブラザーズと一般大衆の両方のためにある物事が進行しているのです。そうでなければこれはスタートしなかったでしょう。わたしたちは話したくて仕方がないのですが、よい意図といえどもわるい反響を生み出す場合があるために、その物事については話すことができません。早まって行なわれる物事は最上の始まりをだめにすることがあるのです。

しかも忘れてならないのは証拠物件なるものについては別な面があるということで、それはあなたもよく知っておられますし、わたしたちの希望の達成を忍耐強く待たねばならない理由もよく理解しておられるでしょう。つい先日わたしはそのような希望達成の可能性が出てきつつあるという意味の一通の手紙を受けとりました。それでいつかその筋から

支持がくると思われるので、そうなれば世の中にとって祝福となるでしょう。ですからふたたび申しますと、わたしは時の流れを審判として信念をもって待つ必要があるのです。

身の安全とか個人的理由などと関係のない、自由に話せてわたしを支持すると思われる個人的な目撃証人に関するあなたの眼目はよくわかります。しかし疑い深い人がわたしの宣誓書を疑問視するのと同じように、他人の宣誓書をも疑問視しないでしょうか。このことは最初の著書に述べられた会見（注＝一九五二年十一月二十日、デザートセンターにおける金星人との初対面）のときにいあわせた目撃者たちの宣誓証言に関して証明されました（注＝これらもみな疑われたという意味）。非難者があくまでも非難者であろうとするとき、本人は自分の前に全能の神をもちだしてなおも疑問視するでしょう。一般人さえも自分にとって新奇な物ならすぐに疑います。

別な惑星で作られた物品をということですが、自分で作れるかもしれないような物がはたして役に立つでしょうか。本書の読者全員に見せることの不可能は別として、わたしたちはこの種の写真に関する同じ古い話に直面しています。「アダムスキーがこれやあれをでっちあげて撮影したのだ」とか「この台付き杯やあの品物のいったいどこが違うというんだ」という声をあなたは予測できませんか。しかもわたしが宇宙船内で親しく見た物から判断すると、地球で製造されたおびただしいタイプの台付き杯に相違がないのと同様に、金星の一個の台付き杯と地球のそれとに表面上の相違は全然ないのです！

地球上のいかなる物ともまったく異なる物体である宇宙船の写真について人々が何と言ったかを考えてみて下さい――しかもそれは世界各地で多くの人々によって撮影されたものなのです！　ですからどんなに人が見ようとも本人が真実を見きわめるのに必要な何かを持たない限り、証拠として示された物は何にもならないでしょう。本人は世の中のあらゆる意見を無視して、なおも自分の理解力を満足させるような具体的証拠を望むでしょう。

だいたい次のように言えます。自身の内部の生命の深遠さを持つ人は証拠類を必要としないけれども、それを持たない人はイエスが言ったように、シルシを求めても与えられないでしょう。シルシが与えられても疑う人はそれを理解しないからです。このイエスの言葉は現在でもまったく真実です。

真理を持つ人は証拠を求めようとはしません。なぜなら本人の内奥の直感力が証拠自体の奥にひそむ真理を認めるからです。わたしは先に出した書物に関してこの明りょうな確証を持っています。ご存知のようにわたしは〝健全な人々〟のすべてに会える都市よりも山中の生活を好むつまらない人間です。あの書物（注＝邦訳〝空飛ぶ円盤実見記〟）には人々を左右する力を持つ心理学者、精神分析学者、批評家などにたいする資料が豊富におさめてあり、しかもかれらは活躍しました！　それにもかかわらず書物は世界中にゆきわたったのです。あなたはわたし宛にきた多数の手紙を読みましたが、懐疑的な非難がましい人は少数で、ほとんどが称賛の手紙だったのを知っているでしょう。またずいぶん多くの人が自分の個人的体験を持ったけれども、具体的証拠を提供できないばかりに他人に語るのを恐れたとか、友人や家族に話そうと努力したけれども不幸な結果におわったと述べていることに注目したでしょう。

人間の改善のためにもちだされたすべての物を非難し嘲笑したのは、すぎしむかしの――現代でもそうですが――いわゆる自称権威者たちではなかったでしょうか。要求された証拠は時機が早すぎたために賢明な

配慮によって公開できませんでしたが、時と忍耐がそのアイデアをもたらした人を最後には擁護しました。人類はこんにちこの〝時と忍耐〟によってすばらしく豊かになったのであって、疑い深い人によるのではありません！　現代でもこのことは言えるのです。しかしあなたを納得させたいことが一つあります。ブラザーズは、もしわたしたちがかれらの指導に従うならば、前回の書物でわたしたちを失望させなかったのと同様に今後も失望させることはないでしょう。わたしたちはこれまでにその書物を広めるのにほとんど何もやらなかったのですが、だれかが大きく援助したにちがいありません。ですから最初の書物で出発した手順にあまり変化をきたさないようにして前進しようではありませんか。きっと失敗はしないでしょう。非難者たちには騒がせておけばよいでしょう。かれらの反対の声はかれら自身の好奇心のための興奮剤として役立ちながら、ますます深い調査分析を行なうようになるでしょう。真理は常に個人的なせまい意見をこえて伝わるものです。

本書にも述べてありますが、あなたが手にとってみたあの小さな金属のかたまりの分析については、以前の経験にかんがみてためらっています。数年前わたしは地球の物でない一個の合金の化学分析をしてもらったことがあります。最初は分析だけを考えていましたので一科学者に依頼したのです。結果を尋ねるために電話をかけると相手はたいそう興奮しているようでしたが、のちに研究所を訪れたらすでに落ち着いていました。それとも他のだれかが落ち着かせたのでしょう。そしてまったく問題にしていないような様子を示そうとしていました。こんな物は鉄クズ場にいくらでもころがっていると相手が言いますので、当然のことながらわたしはかれの率直な見解をしつこく要求しました。すると普通の合金よりも成分に〝わずかな相違〟があることを認めましたが、それは熱の変化か、当時だれも気づかなかったちょっとした〝偶然の事故〟によるものかもしれず、そのために同種の合金がいかにも他に存在しないかのように見えるのだと言います。

この体験はよい教訓になりましたので、あなたにお見せした、しかも〝地球以外の物〟であることをわたしが〝知っている〟この小さな金属を、真相がまじめに探求されて公開してよいと確信できるようになるまでは他人に手渡すことによって失いたくないのです。

わたしは自分の知恵がブラザーズにくらべてはるかに貧弱であることを知っています。だからこそ判断はすべてブラザーズにまかせるのです。あなたもそうなさるでしょう。ブラザーズがこの世界の他の地域で（さらに多くの地球人と）コンタクト（接触）するべく努力していると信ずべき理由がありますが、これは一証人である友をわたしがだましているといって人々が――最も疑い深い人さえも――わたしを非難しないようにとの配慮がなされているからです。まったく名もないその人をもし一般に紹介したら、それはわたしの陳述を支持させるために買収したのだという非難さえ起こるでしょう。

他の惑星から来るブラザーズは、地球人の本質が同胞間の生活の向上を願いながら覚醒期にむかって少しずつ活動するまで待っているのではないでしょうか。たぶん信念が最重要であると思われます。盲目的な信念ではなく、内奥からのみわき起こる、しかも真実なるものからはずれないあの英知ある信念です。わたしの最初の書物はこのような目覚めに貢献しました。本書の目的はこの目覚めをうながして、より大いなる成長と理解をもたらすことにあります。

最初の書物の中で述べられた事件にたいしては、いかなる科学的な裏付けも引用されませんでした。しかしその書の刊行以来発生した種々の

出来事や世界各地で起こった事件類は、わたしが発表した日に提出できたかもしれないいかなる証拠物よりも大きな裏付けとなってきました。いかなる理由にせよ真実が現われることを望まない反対勢力の存在にもかかわらず、このことは発生しました。本書についても同様の事が起こるでしょう。わたしはこれまでに導かれたばかりか、多くの物事をよけて通るようにしっかりと守られてきました。いままでにブラザーズはわたしを絶対にダウンさせたことはありません。ですからわたしたちが忍耐強く冷静な自信をもって待つならば物事は順調にあらわれるでしょう。個人としてのわたしに与えられるかまたはわたしが与え得るよりももっと豊富な証拠が世界中に出現するでしょう。

ジョージ・アダムスキー

●序

デスモンド・レズリー

アダムスキーとわたしとの共著 Flying Saucers Have Landed（邦訳〝空飛ぶ円盤実見記〟）が出版された当時までわたしはかれに会ったことはなかった。着陸した円盤とコンタクトしたというかれの声明に関して、その目撃談の発表を保証するに足る証拠があることは出版社もわたしも意見が一致していた。そしてわたしたちが正しかったことはのちに発生した事件が証明したのである。一九五三年十一月、すなわちわたしたちの書物が出版されてから一ヵ月後、アダムスキーの撮影した円盤とほとんど同型の物体が英国ノーフォーク州ノリッジの上空を飛んだ。これは英国天文学協会とノリッジ天文学協会の七名の会員によって観察されて、その一人であるポター氏がドームと丸窓（複数）の付属した一機の円盤をスケッチしたが、外観はアダムスキーの写真の被写体とそっくりだった。

一九五四年二月十五日、十三才と八才になる少年二人が英国ランカシャー州コニストン上空の雲間から降下した一個の物体の写真をとった。この写真は少々ピントはずれであったが、空飛ぶ円盤の形をはっきり示していて、ドーム、四つの丸窓、一種の球型着陸装置などはアダムスキーの写真のそれに酷似していた。簡単な検査でわかったかぎりでは、唯一の相違は両者の角度にあった。少年の写真は円盤の垂直軸にたいして約二十五度の角度でとられているが、アダムスキーの写真は約五十度の角度でとられている。さらに徹底的な調査によって次のことがわかった。

1. 少年たちはネガをねつ造したのではない。
2. アダムスキーの写真からヒントを得て作られた模型を撮影したのでもない。のちになって別な証言がMSIAのレナード・クランプから提出されたのである（注＝〝宇宙・引力・空飛ぶ円盤〟の著者）。かれは直線投射図の方法によって、コニストン円盤はアダムスキー円盤と同型であることを確証し、もし少年たちが模型を作ったとすれば、まず直線投射図を作ってから縮尺によって模型を作る必要があると述べた。こうなると旋盤を操作して正確な放物線カーブの削り作業も必要となるだろう。だが少年たちは旋盤を見たこともないし直線投射法については何も知らなかったのである。はたしてかれらが放物線カーブの削り方を知っていたであろうか。

多数の人がアダムスキーはランプのカサを撮影したのだといって非難した（注＝現在でも日本の自称円盤研究家のなかにはこのようなことを言う人がある）。そうだとすればノリッジ上空に巨大な〝ランプのカサ〟が出現してのち、ランカシャーの空中から突如降下したということは、問題のランプのカサがカリフォルニアから六千マイルの太西洋を横断して飛べるほどの性能を持つ驚くべき自動推進装置をそなえていたにちがいないということになる。また注目すべきことは、もしアダムスキーがランプのカサかその他の人工物を撮影したとすれば、おそらく——早晩——同じ生産ラインから出た第二の類似品がだれかの所有するところとなって正体が暴露されるだろう。アダムスキーのネガはセシル・ド・ミルのトリック撮影の名手ペヴ・マーレーによって検査されたが、かりにインチキだとするなら今まで見たこともない優秀な写真だと断言したし、またジェテックス模型飛行機会社の社長ジョーゼフ・マンサーも検査して、自分の意見ではこの写真は模型を写したものではなく、直径三十フィートぐらいの大きな物体だと述べたのである。

一九五四年の夏わたしはアメリカへ行ってアダムスキーのフィルム全部と撮影道具を調べてみた。かれは上等なニュートン式六インチ反射望遠鏡を持っている。接眼鏡の上部には最も原始的なカメラがとりつけてあるが、これは暗箱とバルブシャッター（注＝シャッターボタンを押しているあいだだけシャッター羽根が開いているもの）と乾板をいれる後部にスライド（注＝ピントグラス）があるだけのものである。このカメラはレンズの役目をする望遠鏡の接眼鏡上に直結してある。

この装置を用いてわたしは遠方に模型の円盤をつりさげて撮影したが、結果は遠方につりさげられた模型の円盤以外のなにものでもなかった。

一九五二年十一月二十日にアダムスキーが金星人と会見したときに立ち合った目撃証人たちがわたしに話してくれた。かれらはその朝デザートセンター上空へ飛来した巨大な、翼のない葉巻型宇宙船を見たのである。そして茶色の上下続きの服を着たもう一人の〝人間〟にアダムスキーが話しかけているのを見た。その訪問者が去ったあと、みんなはアダムスキーのところへ歩みよって、地面に残された二種類の足跡を調べてみた。一つはアダムスキーのもので他方は婦人の〝サイズ4〟の寸法だった。石こうで型がとられたが、その一個は今この文章を書いているわたしの机上においてある。アダムスキーの足跡はグループの方へ移動しており、別な〝人間〟の足跡は円盤が停止していた地点で消えていた。

今年の夏わたしはその場所を訪れたが、かりに気温が華氏百度であったにしても、わたしの足は鮮明な足跡を残せることを発見した。砂中にこのような跡がはっきりつくのは、思うにわたしが以前に水流の存在した土地に立っていたことや地下に水分があったことによるものらしい。

アダムスキーのコンタクトの六人の目撃者——ジョージ・ウィリアムソン夫妻、アル・ベーリー夫妻、ルーシー・マクギニス夫人、アリス・ウェルズ夫人——は、事件発生中ずっと空軍機が低空を旋回したり急降下したりしていたと証言している。これについて空軍は確認も否定もしていない。

着陸した宇宙船とコンタクトしたという人はアダムスキーが最初ではない。実は六カ月前（一九五二年六月）にモハビ砂漠で土木工事に従事していたトゥルーマン・ベサラムという機械工が、大型円盤の乗員と数度コンタクトして、同乗するようにすすめられたという。わたしが受けた印象ではこの種の物語を創作できるほどの空想力を持っているとはとても思えないような男である。また判明したところではベサラムの親方

であるウェルズ・カーゴ土建会社（ファーゴではない）のE・Eホワイトもその円盤が一マイル半の距離から進行して着陸するのを見たが、たそがれの光のなかで故障した飛行機だと思っていた。そのあとホワイトや他の人々は二人の円盤乗員を見た。わたしは、ベサラムが自分の見たものや不思議な訪問者たちがかれに語ったことを充分に理解したとは思わない。ただ大気圏外の物体とその乗員との体験を持っただけのことなのだ。この種の事件にしばしばあるように物語というものは話されるうちに次第に変えられるものだが、オリジナルの録音テープが保存されていて、そのなかで恐れおののいたかれが記憶が消えないうちに発生した事件を訥弁で語っている。わたしが受けた印象ではベサラムは善良で空想力に乏しくて、単純だがまじめな男であった。南米の奥地のジャングルに突然ヘリコプターが着陸して驚異的な白人が出現する光景を土人が仲間に告げるとしたら、さだめし言葉に困るにちがいない。ベサラムはちょうどそんな感じのする男である（注＝ベサラムの体験記の邦訳版が高文社から出ている）。

ダニエル・フライの場合は話が変わる。フライは一九五〇年にニューメキシコ州ホワイトサンズのテスト基地で働いていた政府の技師である。かれの話によれば、ある夕方小型円盤が着陸して人間の声で乗れと呼びかけた。その声は一種のラジオから流れ出た。というのは円盤は母船から遠隔操縦されていたからである。そして円盤の構造と推進法のあらましを説明した。

科学的で正確なフライの記録はベサラムと正反対で、事実や数字になれている技師の典型的なものである。かれのコンタクトは四年前に発生したといっているが、当時はほとんどだれにも語らなかった。クビになったり気違いだとみなされるのを恐れたからである。

わたしがかれに会ってからまもなく、かれはウソ発見機テスト番組に出演することを志願した。一説によれば強制されたともいう。技師としてフライはウソ発見機によってウソが検出できるかどうかを調べるために、事前に自分でテストをしてみるという予防策を講じた。このためかれはわざとウソの年令や出生地などを言ってみたところ、発見機はこれを真実の回答と記録し、自分のコンタクトの体験についてはウソだという結果が出たのである。こののち、われわれ円盤研究家仲間の一人であるハリウッドのマノン・ダーレン夫人が、これについて友人の連邦検察局局長J・エドガー・フーバーに手紙を出した。フーバーはこれに答えて、ウソ発見機はまったくあてにならないもので、ただ感情の変化を記録するだけであって、そのため自分は犯人の捜査にそれを使用することに反対していると述べた。オペレーターに内緒で行なわれたフライの個人的なテストは、この特殊なテストが無益であることを完全に立証したのである。（注＝フライの体験記〝ホワイトサンズ事件〟はいずれ本誌に連載の予定）

アダムスキー、ベサラム、フライの三人は、自分たちの体験は実際的な現実の体験であって、心霊の領域とは何の関係もないと主張する。かれらの話には現実性が含まれていて、自分たちの知るかぎりでは、はるかに進歩した文明の人々が地球を訪れたときに自分が偶然そこにいたにすぎない——ただそれだけのことだと述べている。かれらは信頼できる人物で、しきりに真相を語りたがっているような印象を与えた。しかも普通の言葉でもってどえらい経験を思い出すのは困難だと言っている。みんなが自分の体験の結果としてひどい目にあったのである。きっとジャングルに着陸したヘリコプターを見て仲間に告げる土人も、信じない人間や迷信深い人たちのためにひどい目にあうだろう。

一方迷信といえば、未熟な心霊術者である狂気じみた人が空飛ぶ円盤の分野にはいりこんで円盤問題全体の信用を失わせるような重大な危険をまねいているのは注目にあたいする。

もし真実が自尊ぶったナンセンスの煙幕のもとに失われるようになるとすれば実に悲しいことになる。円盤が実在するとすればわれわれの惑星は有史以来最大の科学的・社会的・哲学的発見事のまぎわに立っていることになるからだ。

わたしが七月にアダムスキーの家に滞在していたごろ、南米から仲間のエド・マーティンズがパロマー山へやって来て、南米各地で発生した着陸事件について話してくれたが、それらには共通点があった。大きな円型の機体、内部にいる美しい顔をした正常な人間、機体周囲の強力な電磁気フォースフィールドなどである。カナダからはオンタリオ州スワスティカ付近に住むガルブレイス氏という時計製作人から個人的な報告を受けとった。一九四八年にかれは二機の大宇宙船が着陸するのを見たという。両方とも一人の人間が出てきて地面から土のサンプルを集めた。その人間は友好的に見えた。しかし機体から放射されるフォースフィールドがあまりに強力だったので——ガルブレイス氏の言葉をかりれば——「それは草をなびかせて、わたしは一個所にクギづけにされた」のである。二度目の機会には一隊の警官が逃亡犯人を捜索中、森林中に光を見たが、かれらはまるで眼に見えない壁につきあたったかのように接近することができなかったという。ガルブレイスも同じく機体ははっきり見えるにもかかわらず、このエネルギーの〝壁〟が接近をはばんだと言っている（かれはそのとき森の反対がわにいた）。しかし搭乗員はかれを安心させるかのように微笑をうかべていた。この不可視の〝壁〟はフランスとイタリアの最近の着陸報告にも語られているが、ヨーロッパの報告で困るのは報告類がほとんどすべて恐れおののいた農民たちから出ている点である。人間が恐怖したときは目撃した物をはっきり記憶できないものである。ベルギーの円盤研究家ジェフ・アシーレンスはこれらの農民に直接インタビューしたとわたしに話してくれた。かれは農民たちが〝たいそう異様な物が着陸する〟のを見たが、恐怖のためにその物の様子を話すのが困難で、それが正確な観察を不可能にしていることがわかったという。

この二年間は他にも多くの実見報告がなされている。なかには明らかにインチキとわかったのもある。こんなのは今後もたしかにふえるだろう。わたしはすべてが狂人やペテン師だとは思わない。一つ困ることは、目撃者の証言に対抗して、この太陽系の他の惑星群に地球人のような生命体が存在することは不可能だということがはっきり証明されたと主張する現代天文学の重圧である。円盤の目撃者か天文学者のいずれかが間違っているということになる。〝科学〟の名のもとに少数の人々を無視するのはまったく簡単だが、それは怠惰な逃げ道である。地球が丸く、蠟が音響を記録し、エーテルが電波を運び、放射線が物質をつらぬいて内部を〝見る〟ことができ、空気より重い物が飛ぶことができるといった主張は、その時代には不可能で科学知識に反するものとしてすべて無視されたのである。火星に関する最近の書物がヒューバートゥス・ストゥルゴールド博士によって書かれた。これは〝この緑と赤の惑星〟と題するものである。それによれば、もしわれわれの観測機械やその知識が正しいとすれば、われわれが知っているような知的生物は火星上で十秒間も生きることは不可能だが、たぶんわれわれは〝何かの重大な要素〟を見のがしているのかもしれず、結局、最良の方法はただ一つ、自分で別な惑星へ行って直接に発見することだとむすんでいる。

考えられる事が一つある。これらの未知の惑星から人間たちがなによりも先に地球を訪問に来るということ、かれらはわれわれにとって少しは利益になるかもしれないようなかれらの芸術・生活・知識・科学・宗教・哲学などをわれわれに洩らしているということである。

これはある人々が生命にかけて誓っていることで、すでに起こっているのだ。一例としてジョージ・アダムスキーは、はるかに高度な進歩をとげた世界から来た人々といっしょにすごした多くの輝かしい時間について語っているし、またかれはブラザーズの知識と哲学の精神的な美しさを努力してある程度自分のものにしている。

最初は、読者がこの驚くべき記録から受ける感じ方に二通りの道だけがあるように思われる。真実かウソかという問題である。わたしとしては読者にたいしてウソであると言えないのと同様に真実だとも言えない。読者は自分できめるべきである。

しかし実際は議論をするのは少々早すぎる。大切なのは読むことで、与えられた教えを研究してみることである。その教えは多くの人にとってすばらしい助けとなり利益となるかもしれないからだ。それが広く吸収されて応用されるときがくれば、アダムスキーと同様の体験を持つ他の人々も名乗りをあげてこの孤独な先駆者の主張を裏づけるだろう。

この世界の新事実（または〝唯一の真実の再現〟といってもよい）を最初に発表した人は嘲笑、侮蔑、〝ペテン師！〟の汚名などがつきものとなっている。先駆者というものは本来時代の数十年先をゆくので同時代人から攻撃されるが、その孫たちは成長してから何をいったい大騒ぎしたのだろうかと頭をかいて不思議がる。孫たちにとってはかつての孤独な先駆者の業績が日常茶飯事として応用されているからだ。

そうなるまでアダムスキーはヘリコプターに乗せられたブラジルの土人と同じ苦境に立つだろう。かれは同乗した。ヘリコプターは行ってしまった。発生した事柄を仲間の種族に語ろうとするが適当な言葉がみつからない。

しかしこうした困難にもかかわらずアダムスキーはともかくもうらやむべき文明の内容を伝えてくれた。われわれの孫たちが充分に楽しめる幸福なるべき文明である。決定権はだれにあるだろう。未来の子孫たちが燦然たる星空をかけまわって天空の音楽を聴くか、それとも奇形化した変形人間となって洞穴に住み、恐怖がかちどきの声をあげる世界で放射能で汚染した土を棒切れでひっかきながら、かろうじて露命をつなぐかはだれがきめるのだろう。

われわれがきめるのだ！　決定権はわれわれにある。創造主の生命を生きるか永遠にほろびるかという究極的結論とともに、ヒューマニティーが眼前によこたわっている。狂奔する原子獣と分裂しておびえきった人間の住むこの地球というヘビの穴に、今や一条の光線がさしこんでいる。それは燦然たる水晶の空艇から放射されており、その中には激情を克服して、しかもわれわれの激情の克服に——もしかれらにまかせるならば——援助の手をさしのべようとする人々がいるのである。この事実を無視することはできない。この惑星の土台自体が不幸を根底として動揺しているときに、すわりこんで騒ぎたてるどころではないのだ。

それではひとつオープンマインドをもって本書を読んでいただくことにしよう。そしてこの中に伝えられている教訓の光が真実として響くかどうかを吟味していただきたい。

*　*　*

第1章

●金星人との再会

ロサンジェルスははなやかな燈火と騒音にみちた、せわしくて落ち着きのない都市で、わたしの山の家の静かな星明りと平穏さにくらべるといちじるしい対照をなしている。時は一九五三年二月十八日であった。わたしがその町へ来たのは刺激を求めたからではなく、前回の書物（注＝邦訳〝空飛ぶ円盤実見記〟）で述べたような種類の、せきたてられるような印象を感じてそこへ引きよせられたからである。

ロサンジェルスを訪れるときの多年の習慣にしたがってわたしは下町のホテルへ投宿した。ボーイがスーツケースを部屋へ運び、チップを受けとって出たあともなお落ち着かぬままわたしは床のまんなかに立っていた。まだ午後の四時ごろで、何のためにここへ来たのかさっぱりわからず、どうしようもない気持だった。窓ぎわへよって混雑する街路を見つめた。たしかにインスピレーションは感じなかった。

ふと思いついて階下へ降り、ロビーを通りぬけてぶらぶらとカクテルラウンジへはいった。そこのボーイとは以前からの顔見知りである。かれはもと円盤については疑っていたが、わたしの話を聞いたり円盤写真を見てからは熱心に興味を持つようになっていた。相手はわたしをていねいに迎えてくれた。少し語りあったのち、かれの話によれば多数の人がかれの円盤の話に関心をいだくようになって、わたしがここへはいって来たらそのことを知らせるようにとみんなから頼まれているという。

かれはわたしの反応を待ったが、わたしは何と言ってよいかわからなかった。さしあたって計画はなかったのである。未知の人たちに非公式の講演をする気分になれなかったが、一方、待っているあいだの時間つぶしにはまたとない方法だと思われた・・・そうだ、わたしが〝何者〟を待っているにしてもだ！

承諾するとまもなく多数の男女が集まった。みんなの関心はまじめなものに思われたので、わたしは最善をつくして一同の質問に答えた。集会を辞したのは七時近くだった。それで夕食をとるために街路を少し歩いてみた。「ついでに何かが起ころうとしている」という感じがたえまなくつきまとうので、一人でいることを選んだのである。

うつろな気持で食事をすませてホテルへ帰ったが、ロビーには知人はいないし、例のバーはもうわたしの眼をひかない。

突然わたしはM嬢を思いだした。この町に住んでいる若い婦人で、わたしの弟子である。彼女は長いあいだパロマー山のわれわれの本拠へ来ることができなかったので、この次ロサンジェルスへ出たら電話をしてくれとわたしに頼んでいたのである。わたしは電話ボックスへはいって相手の番号をまわした。彼女はわたしの声を聞いてうれしそうだった。ただし自動車を持たないので、電車でホテルへ着くまでに一時間ばかりかかるだろうという。

夕刊を買い、わたしに気づくかもしれない人と出会うのを避けるためにそれを持って自室へ帰った。おもしろそうな部分を読んでから、平常ならとばしてしまいそうな記事を我慢して読み通した。これはわたしの意識全体に浸透している不安感を抑制するためであった。

約束の時間がくる前にわたしはロビーへ降りてM嬢を待つことにした。——すると彼女は約十五分遅れて到着した。二人はしばらく話しあって、彼女の心中に秘められてどうしようもなくなっていた多くの難問題について解決することに成功した。彼女の感謝はいじらしいほどで、わたしがロサンジェルスへ来て助けてくれることをたえず念願していたという。

電車の停留所までいっしょに歩きながら、山にいたときから感じていたあのせきたてるような感じは、あるいは彼女のテレパシックなメッセージが通じたせいではないかと思ったが、ふたたびホテルのロビーに落ち着いてみると説明のしようのないものであることがわかってきた。そのフィーリング（感じ）はまだ消えない——それどころか以前よりも強くなっている！

腕時計を見ると十時三十分だ。重大な意味をもつ事件らしいものが何も起こらぬまま夜ふけになったことが心中に失望の波をかき起こした。そしてまさに意気消沈しようとしたときに二人の男が近づいてきて、その一人がわたしの名を呼んだのである。

二人ともわたしにはまったく未知の人だが進みよって来る態度には遠慮がなく、外観も普通の若いビジネスマンと同じである。わたしはロサンジェルスで講演をやっていたしラジオやテレビにも出演したことがあるし、それにパロマーガーデンズのわが家へロサンジェルスからずいぶん多くの人が訪ねて来るので、未知の人がこんなふうに接近してくるのは珍しいことではない。

二人のからだがよく均整がとれているのに気づいた。一人の身長は六フィートをわずかにこえるくらいで、三十才を少しでたように見える。その顔色は血色がよく、黒褐色の眼には大いなる生命の歓喜を示すような光をたたえているが、その視線は異様に突き刺すようであった。黒髪にはウェーブがつけてあり、われわれと同じスタイルに刈ってある。服はこげ茶で、無帽だった。

背の低い男はこれよりも若く見えて、身長は約五フィート九インチと判断した。丸い子供っぽい顔つきをして皮膚が白く、眼はうすい青色である。その髪も波型で、われわれのスタイルと変わることなく、色は砂色であった。この人はグレーの服を着ていたが、やはり無帽である。そしてわたしの名を呼んだとき微笑した。

わたしがその挨拶を認めると相手は手を伸ばした。それがわたしの手に触れたとき、大きな喜びが全身に満ちた。その合図の仕方はあの記念すべき一九五二年十一月二十日にわたしが砂漠で会った人（注＝金星人）から示されたのと同じであった。ついにわたしはこの二人が地球の住人でないことに気づいたのである。だが握手したときにわたしはまったく気楽な感じがした。すると若い方が言った。「わたしたちはあなたと会うことになっていました。いっしょに行ってくださるひまがありますか」

心中にいささかの疑惑もなくわたしは「すべてをおまかせします」と答えたのである。

いっしょにロビーを出てからわたしは二人のあいだにはさまって歩いた。ホテルから北へ一ブロックばかり行ったあたりでかれらは駐車場へはいった。自動車を置いていたのだ。この短かい時間中かれらは一言も発しなかったが、二人が真の友であることをわたしは内奥で感じた。行先を尋ねようという気持も起こらないし、かれらがすすんで教えてくれなくても奇妙には思えなかった。

一人の係員が車をひき出すと、若い男が運転台にすべりこんで、そばへ乗れとわたしに合図をした。他の男もフロントシートへいっしょにすわった。車は四ドアの黒いポンティアック乗用車である。（以下次号）

日本GAP総会、盛況裏に終了

絶賛を博した映画"未来の記憶"

去る十月三十日、東京豊島区民センターにおいて昭和四十六年度日本GAP総会が開かれた。同センターは日本GAPの月例会の会場としても使用されている。総会当日は百名をこえる参加者があったが、これは会員の関心の高さと日本GAPに対する期待の大きさを示しているように思われた。

予定時刻をすぎること数分、一時すぎに司会者三田亮一氏により総会開会が宣せられた。続いてプログラムどおりに講演へと移った。まず始めは韮沢潤一郎氏の「月はまだ生きている」と題するものである。氏は米国アポロ計画の成果を中心にした最近の宇宙開発の結果アダムスキーが生前に述べた月面の状態が証明されつつあることを強調された。特に興味深かったことは、一般に真空状態といわれている月面にかなり濃い大気が存在している可能性の大きいことを月面上での音波の伝播や衝撃波の存在などの資料をあげて説明されたことである。

韮沢氏に続いて安斎純夫氏が「金星より見た未来社会」と題する講演を行なった。氏は現在の地球社会の混乱はセンスマインドに頼っているからだと前置きした後、地球の目指すべき手本として金星社会を紹介された。金星には政府はなく、それにかわるものとして一般大衆から選ばれた人々によって構成される管理機構があり、バランスが保たれていると。また教育問題に関しては教師と弟子は固定化されたものではなく互いに学びあい教えあうことなどや、政治、その他男女問題など幅広く紹介された。安斎氏は最後に「肉体の心を意識にまかせること以外本当の未来社会の建設はできない」と強調され、この講演の結びとされた。

三番目は大阪支部代表であられる市川宏氏が「大阪支部の現況」と題されて大阪支部月例会の様子などを詳しく報告された。大阪では昭和四十四年七月に日本GAP大阪支部が発足し、翌八月の月例会からアダムスキー哲学の輪読研究が始まったそうである。出席者は五、六名ではあるが熱心な方が多く、特に京都の久世先生が市川氏と共に大阪支部の中心的役割を果たされているとのことである。久世先生の勧めもあって昨年五月からは一ヵ月に二回（第一と第三日曜日）の例会を開いているそうで、輪読研究も〝テレパシー〟と〝宇宙哲学〟を各一回終わったという。「今後は輪読研究と想念観察の二本立てで努力してゆきたい」という言葉で市川氏は講演を終えられた。

講演の最後は久保田八郎日本GAP代表である。講演は「アダムスキーの哲学」と題し、次のように宇宙哲学の平易な解説を行なった。つまり「人間の精神面を形成するものにはソウルマインド（宇宙の魂）とセンスマインド（肉体の心）があるが、一般にソウルマインドは気づかれずセンスマインドのみに頼って生きている。したがってこれによって混乱やトラブルが発生するのであるから、センスマインドをソウルマインドに吸収させなければいけない。宇宙哲学は結局のところ以上のことを言っているのである」また最後にGAPは単なるUFO現象の研究団体でも道徳修養団体でもなく、宇宙哲学とUFOの研究の両方の柱を持った団体であることを強調され結びとされた。

四氏の講演が終わると、すぐに座談会へとプログラムは進み、講演者への質問が開始された。ここでは非常に多彩な問題が提起され回答されたので、ここですべてを記すわけにはゆかない。一応項目のみあげると次のようなものである。（カッコ内は回答者を示す）想念観察法について（市川氏）、アダムスキーのコンタクトの真偽について（久保田代表）、触覚及び警戒の状態について（久保田代表）、アダムスキーの金星文字について（久保田代表）、月面上の大気について（韮沢氏）、等々。時間が充分にとれなかったため何人か質問を希望しながら質問できなかった人がいて、大変申訳なく思った。しかしなかにはユーモラスな会話もあり、会場がやわらいだ雰囲気となったなど、座談会は楽しいものであった。

座談会のあとは十分間の休憩をはさんでUFOスライドの上映となった。スライド説明には久保田代表があたる。一九六六年六月十五日夜にフランスのアベイロン村において発生した一連の火の玉着陸事件、一九七〇年一月七日にフィンランド南部のイムジャルビーでのUFO目撃事件、そしてイギリスのウォーミンスターのクレードル丘で一九七〇年三月二十八日に撮影されたUFO写真など興味あるスライドが続いた。また特に興味深い写真としては、日本GAP会員の斎藤雄久氏の撮影した数枚のUFO写真、G・アダムスキーの有名なUFO写真及び世界GAPの紹介等のスライドがあげられる。スライドを製作した代表の苦労も大変なものであったと思われる。

スライドの上映が終わるとすでに四時、総会の開始から三時間が経過したが、席を立つ人もほとんど見あたらなかった。ここで出席者全員による記念写真の撮影となった。なにしろ百名をこえる大人数のため会場の係りも整理に一苦労であった。四時三十分近くなって写真撮影も終わり、第一部が終了した。

第二部は同センター六階の文化ホールに会場を変更して行なわれた。プログラムにもあったとおり、ドイツ映画「未来の記憶」の上映である。本誌第四十七号にもあるとおり、この映画はエーリッヒ・フォン・デニケンの同題の著書を映画化したものである。最近テレビでも放映されたが、テレビの方はかなりカットされて少々感動が薄い

のに対し、映画を大画面で見るのは大変迫力もあり、感動された方も多かったようである。

先史時代に宇宙人が地球を訪れたことがあり、彼らは神として崇拝された。そしてその証拠はほとんどの民族の神話に、もろもろの宗教の教典に、そして考古学の発掘物にまがいようもなく認められる。これがフォン・デニケンの主張であるが、これは観覧者に充分伝わったと思われる。

全九十三分の「未来の記憶」も終わり、司会者の三田氏によって閉会の言葉が宣せられたのは七時すぎであった。今回の総会開催に御協力下さった方、御出席下さった方、特に遠慮はるばる総会出席のため上京された方等、この総会の大成功は会員個々の力によったものであると言えるだろう。

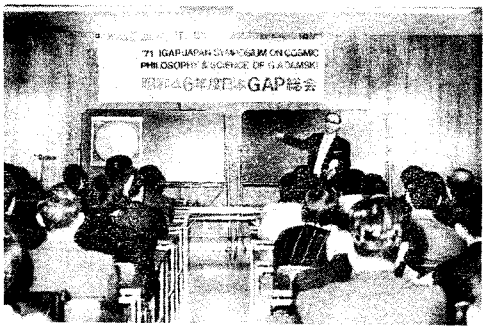
（篠木裕二記）

受付

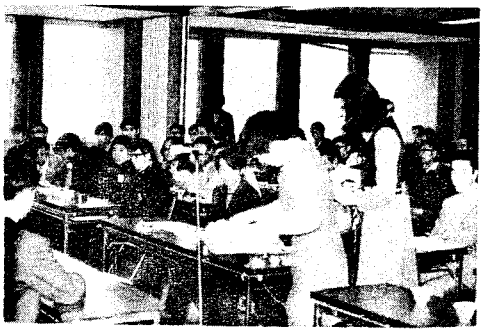
三田氏の司会

安斎氏の講演

久保田代表講演



菓子サービス



参会者全員記念写真

GAP英語教室 (1)

久保田八郎

海外のUFO関係英文原書を読もうとする人のために今回から英語教室を設けることにした．紙面の都合により詳細に説明することは不可能なので，UFO文献によく出てくる特有の単語・熟語等を主体にして解説するつもりである．基礎的な英文解釈法や文法等については別な参考書で学習されたい．UFO—特にアダムスキー関係原書の入手法については本誌第45号32ページを参照されたい．

space people（宇宙人）　宇宙人を意味する英語として最も普通のいい方である．ただしこれは複数だから二人以上を意味する．一人だけの場合はspace man というが，これは少し文語がかった格調高い語で，複数ならばspace men となる．もちろん会話に用いても差支えない．例＝He was given a message by the space people to earth men.（彼は宇宙人から地球人宛のメッセージを与えられた．）GAP関係者は特に宇宙人のことをSpace Brothers または省略して単にBrothers といっている．これは"他の惑星の兄弟"という意味で，厳密にいえば Space Brothers and Sisters となるが，普通はただ Brothers という．いずれにしても強調するために最初の文字を大文字にする．sky people といういい方もあるが，これは"天空の人々"というような意味で，文学的表現として用いる．一般の慣用語ではない．この他に円盤から出てきた"人間"を意味する語として humanoid（ヒューマノイド）という言葉もよく使用されるが，これは"外観が人間に似たもの"という意味で，人間か動物かよくわからないが一応人間らしい形をしていると思われる生物をあらわす．主として科学的な記述に用いられる語．なお空想科学小説では人工的な合成人間を android（アンドロイド）ということがあるが，もちろんほんものの生物ではない．humanoid に類する単語として entity というのもたまに用いられる．これは辞書には"実体"という訳語しか出ていないが，要するに人間か動物かわからぬ一種の"生きもの"というような意味である．例 The other workmen all fled and he found himself alone with three seven-foot tall entities in transparent suits covering head and body.（他の労働者たちはみな逃げてしまい，彼だけが7フィートもある背の高い三つの"生きもの"と相対しているのに気づいたが，それらは全身を覆う透明な服を着ていた）この他に円盤から出てくる"生きもの"の意味で用いられるものに creatureや beingなどがある．

flying saucer（空飛ぶ円盤）　いわゆる空飛ぶ円盤を意味する最も代表的な英語はこれであるが，厳密にいえばこれは"空飛ぶコーヒー台ザラ"の意味である．この語の起源は次のとおり．On June 24, 1947, airman Kenneth Arnold startled the world with his claim to have seen nine disc-shaped objects travelling in line over Mount Rainier, Arnold likened the objects to "saucers skimming over water."（1947年6月24日，飛行家のケネス・アーノルドはレイニア山上空を一列になって飛ぶ9個の円盤型物体を見たと称して世間を驚かせた．アーノルドはその物体群を"水上をとびはねて進むコーヒー台ザラ"にたとえた．）こうして flying saucer なる語が誕生したという．これ以外に flying disc という語もよく用いられる．"円盤"という日本語に相当する英語としてはこの方が適切である．flying object もひんぱんに出てくる語であるが，これは"空飛ぶ物体"という意味で，必ずしも円盤型の物とは限らない．科学的な記述にはご存知の"UFO"がよく用いられるが，これは略称で，正しくは Unidentified Flying Object（未確認飛行体）と書き，円盤型ばかりでなく葉巻型，三角形その他あらゆる形をした未確認飛行体（飛行機・気球・流星その他の既知の物として確認されない飛行体）を総称するにはUFOとあらわす方が正確である．アメリカ人のなかにはこれを"ユーフォー"という人もあるが，"ユーエフオー"といっても差支えない．どちらでもよい．

space（宇宙）　厳密にいえば space は"宇宙空間"という意味で用いられる一般的用語である．したがって宇宙船は space ship，宇宙服は space suit，宇宙開発は space development 等々．例＝He saw a huge space ship about 1,000 feet away from him, hovering not more than 200 feet from the ground.（彼は自分から約千フィート彼方の，地上せいぜい二百フィートのところに浮かんでいる巨大な宇宙船を見た．）大体宇宙という意味では universe と cosmos という二語があるが，前者は万物を含む宇宙をあらわして"物"に主体をおき，後者は秩序・調和に主体をおいている．いずれにしても哲学的用語であって，三次元の物理的宇宙空間ならば space である．だから宇宙船を universe ship とはいわない．ところがCosmic Manという言葉がアダムスキー関係の著書に出てくるが，これは別な惑星からきた宇宙人の意味ではなく，"宇宙的な人間"すなわち精神的に高い進歩をとげた高貴な人を意味するので，いわゆる宇宙人とは異なる表現である．地球人でもこのような人がいれば，Cosmic Man といってよい．（以下次号）

英単語暗記法　ついでながら英単語の暗記法について一言．よく連想記憶法と称して，たとえば ictionary を"字引く書なり"とおぼえたりする方法があるが，1，2の単語を記憶するのならともかく，数百数千の単語を暗記するにはかえってわずらわしくなって混乱するからよくない．それよりも合理的なのは語源によっておぼえる方法である．たとえばラテン語の dictio（コトバを発することの意）を知っていると，コトバを集めた書物が ictionary，コトバを聞きとらせる口述筆記・命令が ictation，コトバで命令を発する独裁者・口述者が ictator，したがって独裁が dictatorship，コトバ使い，語法が diction，よいコトバから成る格言が dictum 等，関連した単語が五つ六ついっぺんに記憶できるのである．こうした語源・語幹分析を行なうには"小川芳男編・ハンディー語源英和辞典（有精堂）"が好適である．ただしこれもあまりこだわると"分析のための学習"化し，"習うよりは慣れよ"の法則に反することになって，会話の場合などとっさに口から出なくなるおそれがある．特に初学者にはよくない．そこで結局英単語を楽に早く暗記する方法（王道）はない．やはり最高によい方法は「dictionary は辞書である！辞書はdictionary というんだよ！」と，もう一人の自分が自分自身に呼びかけるような気持でたえず反覆して自己暗示をかけるのである．

声・声・声・声・声・声

気温も低くなり寒さを感ずるこのごろ。でも何かの胎動がひしひしと感じられる。世界は刻一刻と変化している。気候の変化、人間の心の変化、すべてぼくのまわりの人々も変わってゆく。ぼくの友達にも仲間の不満を言う人、非難する人、悩んでいる人、この世で何をなすべきかわからずただ生きるだけの人、金、女性、名誉などを求め、ひどい人になると何も求めない。世間でいっているニヒリズムか？　でもそのなかで何かが動こうとしている。それは何かよくわからない。けれど歴史が証明するだろう。

—中略—現在学生の身で中々思うように手助けできなくて恐縮しているしだいです。受験が来年あるので少しあせっていますが自己をコントロールするのにがんばっております。ジョージ・アダムスキー氏の偉大さが宇宙哲学の勉強や自己の成長にともなってよく身にしみてきます。久保田先生ならびにGAP会員の方々に（総会で）会えたのはこの地球に生まれた私にとって最高の喜びです。先生方に会えなかったらつまらない人生になったでしょう。私はまだこれからです。道は無限ですけど進まねばいけません。がんばります。十月三十一日のGAP総会での「未来の記憶」の映画はとてもすばらしかった！（千葉県　田沢憲一）

東京のGAP総会はとてもよかったです。とくにデニケンの映画はため息が出るほど説得力に富んでいて、強く印象に残っています。映画館ではムリだとしても、GAP有志が中心になって大学などで公開できるといいのですが。（神戸市　浅井総一）

先日、日本GAP総会に参加いたしましたが、各界の名士達とたくさんの人々が出席されていたのには驚かされました。仲々すばらしい催しでしたが、今後なおいっそうの充実を願ってやまないものです。

私はUFOと超心理、それに付随して出てくる宇宙考古学や新しい革命的世界観や歴史観のために生涯をかけるつもりでおりますが、若輩ながら右へ左へと日々元気よく活動しております。—中略—私達が着手している方面だけはセクト主義や排他主義におちいっては絶対にならんと自負しておるのですが。またいかなるセクトも創立と同時に世をつくりなおしてゆく任務があったと、それが主なる意識の何かを創造せよという衝動であったと思うのですが、いかがでしょうか。私は今きっと強い世界的連帯の中で事の行なわれる必要性があると感じております。世界最大の組織NICAPなどとの連絡もしくは友好など代表はどのように考えられますか。（東京、日大超心理研究会責任者　高橋洋一）

（もちろん他のグループとの交流・友好は望ましいことですが、NICAPをはじめとしてアダムスキーを認めようとしないグループに対しては如何ともなしがたいような状態です—編者）

〝宇宙哲学〟〝生命の科学〟〝テレパシー〟等、アダムスキーの全訳書を取り寄せて、ときどき読んでいます。ムズカシイ！

大学についての感想を一言。ほとんどの学生は〝与えられた知識〟をただ吸収しているにすぎないように思われます。理解できない場合、一応〝Why？〟はあります。が、自分の考えた事柄と教授—本の説明とが一致した段階で満足し、それですべてが理解できたと思って、それ以上は考えることをやめているようです。それからさらに〝Why？〟と考える学生はほとんどいないように思います。シツコクねばるのが（追求するのが）非常に大事だと思いますし、そのためには金星も重要視されているらしい〝興味〟の存在の有無がカギであるとさらに感じます。よって小生はGAPに入ってよかった。（大阪府吹田市　清水畑　博）

一九七一年十月四日午後六時十五分頃、当地函館上空でUFOが多数の人に目撃されました。（自分は街へ出ていて見ませんでした）子供達の話によるとオレンジ色の赤味を帯びた飛行体で、ジェット機が火を吹いて海中に落下した様だったとのことです。子供達は第二のバンダイ号事件かとさわぎたてておりました。

当夜FM放送や日本短波放送で報導されたので（これは私も聞きました）久保田様も御存知かもしれませんが、翌日の北海道新聞朝刊函館版第十五面にその模様が写真入りで詳しく報導されておりますので、切抜きをお送りします。当夜子供達には空飛ぶ円盤であろうと話しておいたのですが、この新聞記事を見て、目撃が函館だけでなく北海道一円であることを知り、またその内容からしてこれは間違いないという感じを持ちました。—以下略（函館　小坂幸平）

私は現在高校の三年生で、大学進学を目前にしています。ところがアダムスキーの著書類を読んでいたく感動し、自分の進むべき道はこれだ、大学進学などはもうどうでもよいと思うようになりました。しかし両親は宇宙的な事には全く関心がなく、私の進学をすすめています。どうすればよいでしょうか。（新潟市　足立亘宏）

（これに類した質問をこれまでに多く受け取っています。それに対して回答はただ一つ。「進学できる恵まれた環境にあるのなら喜んで進学しなさい」と。宇宙哲学やUFOを研究してすばらしく進歩した他の惑星の状態を知るに及んで、地球上の事物がイヤになるかもしれませんが、私たちはまだ地球上で学ばねばならぬことが沢山あり、種々の体験を持つ必要がありますから、まず現実の大地に足をしっかりとつけて、人なみの生活体験を持ちながら宇宙的な思想によって生きるというのがよいと思います。よって地球人の学生はまず学校で習う事をしっかりと勉強し、種々の試験などを突破したりして人なみの体験と労苦を味わうべきで、これを抜きにして宇宙の事象を夢想しても始まりません。一応地球上の慣行や常識にしたがって他と調和するように心がけるべきでしょう。—編者）

△返書▽お返事をありがとうございました。自分が大学とか勉強とかに対していだいていた習慣的思想を排除することができ、地球上の学問を第一と考えることができます。

日本GAP月例研究会

日本GAPは左記のとおり東京と大阪支部の二個所で月例研究会を開催して会員の研修を行なっている。特にUFO関係のスライド映写も実施しているが、貴重な資料をスライドで公開しているのは我国では日本GAPだけであり、希少価値が高いものと信ずる。都府内外近郊の方はぜひ参加されたい。

東京例会

1. 日時　毎月第一日曜日、午後一時より四時半まで。（ただし三月だけは会場を三階にしますから、間違えぬようご注意下さい）
2. 会場　豊島区民センター四階会議室。（国電池袋駅の東口下車。三越デパートの左横の道を奥へ奥へと行けばよい）
3. 会費　百五十円。茶菓が出る。
4. 携行品　テキストとして「宇宙哲学」を持参のこと。講師は久保田代表。

◎代表挨拶、経過報告、「宇宙哲学」研究、質疑応答、自己紹介、座談会、スライド映写の順。

大阪支部例会

1. 日時　毎月第一日曜日と第三日曜日の二回開催。午後一時より京都会場は五時まで、尼崎会場は四時まで。
2. 会場　＊第一日曜日＝京都市北区上加茂、山本町五〇　久世章業宅（電話〇七五—七八一—七二八八　京都駅西口よりバス2番または9番に乗り、〝上加茂ミソノ橋〟バス停で下車。橋を渡り、上加茂診療所の隣り）
　＊第三日曜日＝兵庫県尼崎市　尼崎産業郷土会館（阪神電車〝大物駅〟にて下車。すぐ北側）
3. 会費　いずれも百円。
4. 携行品　テキストとして京都会場は「生命の科学」、尼崎会場は「宇宙哲学」を持参のこと。

注意　京都会場は久世氏宅改築のため三月末まで開会を中止し、第一日曜は尼崎会場で開催。四月より京都会場で再開。

アダムスキー哲学三大名著！
絶賛発売中

スペースブラザーズから伝えられた宇宙的思惟法と宇宙的な生き方とを三部に分けて詳述。GAP会員必携の書。注文は各出版元へ直接にどうぞ。

宇宙哲学
¥350　〒45
東京都新宿区納戸町33　たま出版

生命の科学
¥420　〒55

テレパシー
¥290　〒45
東京都文京区白山1—29—12　文久書林

本誌旧号

本誌バックナンバー（旧号）は次のものが在庫。部数僅少につき未入手の方は早目にご注文のほどを。送料は不要。低額切手代用にてもOK。　各¥200

第44号、45号、46号、47号

想念観察手帳

想念感情の観察はアダムスキー哲学実践のキイポイントであり、この実践より真の理解が生じる！
日本GAP特製の手帳を使用すれば記入が容易で飛躍的な向上が期待できる。会員必携の手帳！

¥150　送料45

以上は日本GAPへ直接注文されたい。

編集後記

◎年頭には多数の会員各位より賀状を頂きまして厚く御礼を申し上げます。例によって当方は経費と時間の節約のために賀状発送は勝手ながら一切遠慮させて頂きました。よろしくご了承下さい。

◎遅くなって申訳ありませんが、ここにやっと第四十八号が出来上がりました。本号は三十八ページとしましたので、従来になく充実しました。わずかな増ページでも容易ではありませんが、多少ともご期待にそうように努力しました。

◎「なぜ彼らは来るのか」は本号で完結の予定でしたが、紙数の都合により次号で完結とします。

◎今回は想念観察の体験記を特集しました。特に、超人的な努力を傾注してセント（聖者）の道を歩もうとされる藤原、市川両氏の体験記は貴重な一石を投ずることと思います。観念や理論の遊戯にとどまることなく、このように実践してこそアダムスキー哲学が生かされることになります。

◎そこで本号発行と同時にGAP特製の「想念観察手帳」を頒布することになりました。ふるってご利用下さい。随時記入できるようにきちんと出来上がった手帳があれば自分もやってみようかという気持が起こります。詳細は右ページの案内をご覧下さい。

◎本号より「空飛ぶ円盤同乗記」の改訳を連載します。今度は現代の風潮に合わせてうんと平易な訳文にしましたから、読みやすくなったと思います。この原書には豊富な写真類や図解等が掲載してありますが、それも次号から追い追いに載せる予定です。

◎英文の原書を読もうとされる方のために「GAP英語教室」を設けることにしました。本来ならば希望者をつのって一定場所に参集の上、アダムスキー関係原書講義による英語研究会を開催したいところですが、種々の制約により目下は不可能です。本号のは教室と銘打つほどの本格的なものではありませんが、多少とも参考になれば幸いです。これについてご意見や質問があればお寄せ下さい。

◎近来、編者が独善的自己満足におちいっているという批判があるようで、これに関連してか編者に関する種々の奇怪なデマが流されており、加うるにGAP改革運動と称する動きがあって会員間に困惑やトラブルが発生しているようでありますので、この際立場を明確にしておきたいと思います。

そもそもGAPというのは十数年前にジョージ・アダムスキーが全世界から来るぼう大な質問状に対して回答不可能な状態になったために、彼の選択により各国に一名ずつのコーワーカーと呼ばれる代理人をおき（彼は一国に二名はおかなかった）、著書の翻訳権を与える一方、各コーワーカーが自国内の読者から寄せられる質問に対して代理として回答を出すという企図のもとに開始されたもので、各国とも原則として個人活動として行なわれています。これはトラブルの発生を防止するためであり、また長続きさせようという慎重な配慮のもとに計画されたためであって、そのためのコーワーカーは自己犠牲の上に立つ献身的な人々だけが選ばれています。また各コーワーカーが発行する機関誌も大体に「ニューズレター」という題号でもって本来は読者の質疑に対する回答の意味で出されるもので、多人数の合議制によって編集発行される同人雑誌ではありません。数百の会員を擁するために会合を開くことがあり、その際は一応グループの形をとりますが、「トラブル発生の際の責任は久保田のみが負うのであって、他のだれにも責任はない」と世話人の方に表明しております。幹部といっても明確な組織化されたものではなく、奉仕的に援助を提供される方を便宜上そのように呼んでいるだけで、制約で規制されているわけではなく、責任もなく、全く自由な立場にあります。したがってアダムスキーの哲学を強制するのでもなければ、これを教条化してだれかがリーダーになろうとしているのでもありません。しかし故意の曲解やデマのねつ造等により会員間に混乱が生ずる場合は、責任上編者が何らかの処置を講じます。また月例研究会で編者がアダムスキーの哲学書を講ずるのは翻訳者としての責任上詳細な解説を試みるにすぎないのであって、押しつけようとするのではありませんから誤解なきようお願いします。要約すれば、編者はアダムスキーの要請に応じて日本のコーワーカーとしての責任を過去十数年の苦闘の末果たしてきたということで、独善的自己満足ところか現在もなおこの活動で苦慮しています。また元来一定の規約のもとに多人数の合議制で発足したグループ活動ではないので、GAP改革運動と称するものもスジ違いであることを表明しておきます。

◎デマといえば、斎藤雄久君撮影の8ミリ円盤実写フィルムを編者が横取りして返さず、昨夏の大阪支部大会で同君が急病のため出席上映不可能となったというのも編者の巧みなロ実であるというウワサが流れたようですが、これは事実無根です。むしろ編者はかねてから同君に「貴重なフィルムであるから自分で秘蔵しておく方がよい」とアドバイズしていたほどで、その証拠にこの一月三日夕方六時五分よりNHKテレビ第一放送の〝新春こどもショー「ふしぎな世界」〟で同君がフィルムをスタジオへ持参して映写している場面が放映されています。今後編者に関して疑惑を生ぜしめるようなウワサを耳にされた場合は、まず編者宛直接にお問合せ下さい。真相をお伝えします。

◎もちろん現在のGAPのあり方を可とするわけではなく、能率のあがる種々の改善策を考慮してはおりますが、事情もあり、当分の間現状維持を続けざるを得ないと思われます。本格的な〝知らせる活動〟ということになれば出版社を設立してア氏関係著書を全国店頭販売で頒布するのが最良策ですが、これには少なからぬ資金を要しますのでおいそれとはゆきませんが、そのような構想は持っています。しかし現会員の方にはアダムスキー関係の資料はすでに充分に与えられているのですから、あとはア氏のティーチングズ（教え）の実践如何にかかっていますので、その方に力を注がれることをおすすめします。

◎前記のNHKテレビ番組はまじめな立派な企画であり、茶化し半分なUFO番組の多い昨今、見事なものでした。出演した多くの子供たちがアダムスキーを知っていたのはオドロキでしたが、同時に上映された米国で撮影の金星型円盤の滞空する場面はすばらしく、アダムスキー撮影の円盤と全く同型でした。

◎旧臘には浅草の堀川とき様より五万円の御寄付にあずかりました。その他多数の方から有形無形のご援助をいただき厚く御礼を申し上げます。（久）本号より値上げ！

1972・1
GAPニューズレター 48号
編集発行人 久保田八郎
発行所 日本GAP
東京都江戸川区篠崎六―二三一
振替 東京三五九一一
（久保田八郎個人名義）
頒価二五〇円・送料四五円